

辨榮
聖者

ひるぎふのうた

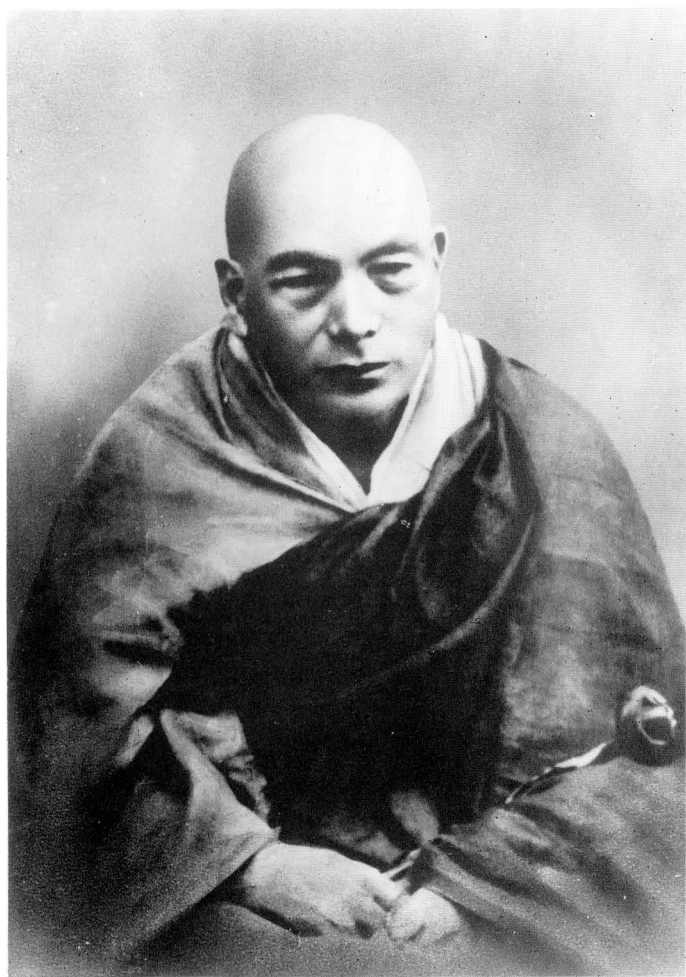
上

光明大系

お慈悲のたより 上巻

巻頭お写真説明

- (1) 辨榮聖者尊影 大正九年十月 京都市知恩院勢至堂別時にて
- (2) 衆生愍念觀音菩薩図



光明大系

お慈悲のたより 上巻

巻頭お写真説明

- (1) 辨榮聖者尊影 大正九年十月 京都市知恩院勢至堂別時にて
- (2) 衆生愍念觀音菩薩図



受けがたき人身じんしんをうけ遇あひがたき佛法ぶつぽうにあふことを得えたるの幸さい、人身ひとの頭腦あたまのぐ奥おくに秘ひそ
 める如來にょらいの子こたる靈性れいせいを開かい發はつし、現在げんざいより通つうじて永遠えいゑん不滅ふめつの生命せいめいを發得はつとくせられむこと
 を祈候いのりそう、其靈性そのれいせい開發かいはつする時は絶對ぜつたい大靈だいれいなる無量光むりやうくわうにして無量壽むりやうじゆの如來にょらいと合あ一いつす。こゝ
 に於おいて如來にょらいは眞實しんじつの父ちちなることを悟さとらん。極樂ごくらくは本來ほんらい我故郷わがふるさとなることをも覺さとらるれ。
 いかにしてこゝに至いたらむ。即すなはち是佛法これぶつぽうなり。佛法ぶつぽうに門多もんおほしと雖いへども要中えうちゆうの要えうなるものは
 念佛三昧ねんぶつさんまい門もんなり。念佛三昧ねんぶつさんまい門もんにまた方面多はうめんたなりと雖いへども、口くちに聖名みなを稱となへ意こころに慈悲じひの
 聖容みかほを憶おしひ愛慕あいほして止やまざる時は面まのあたり慈悲じひのみすがたは想念さうねんの中なかにおがむことを
 得うべし。行住坐臥ぎやうぢゆうざぐわい一切いっさいの作務さむに拘かはらず憶念常おくねんじゆねに繫かつて忘わすれざる時は必かならず業事成辨ごふじやうべんす
 べし。若もし成じやうする時は常とこに如來にょらいと共に在あつて離はなれざるの觀くわんあらん。みだと共に在あらば
 こゝもまた淨土じやうどなり。彌々いよく命終みやうじゆうの時ときにはみだと共に報土ほうどに生しやうぜん。まことに快くわいなら

すや。頼へても頼むべき如來なり。

二

黄に赤に美しき色に熟したる柿の實は食てやると至て甘くして味が美である。モウ凭麁の兆候が現れた上には其柿の實には核が成熟したので之を播く時は必ず萌發して親木と同じ根莖と成り得らるべき成分を有つて居る。

此は長岡法藏寺の邸内の柿の實にて此ほど供せられて味ふた實驗である。此春は其かたちつくりて有りしや心づかぬ花しぼみてあつた。然るに今は凭る立派な熟柿と成つた。

全體此實は凭麁にして斯は大きくしてまた能く成熟したのであらうとなれば、此果實はを以て枝に確乎とついで居る。風が吹いても雨が降りても彼れは離れじと力強く引ついて放れぬ。彼は枝と離れぬしんぼうによりて夜を晝につぎて養分を吸集して

つひに斯やうに成熟したわけである。

六根常に麗はしく姿色自から潤ふ道顔の嚴かになりしは其胸のうちに何とも言はれぬ内容のうちに法悦の美味を實感して居るに相違ない。其麗はしき形色と法悦歡喜の内容との充ち満てるは已に其業識に於て菩薩の業成じて正定位に入つた兆候であらういかにして彼が心靈は凭く成熟したのであらうとなれば、彼は信念と云ふしんぼうが大みおやの恩寵との間に於て不離の關係を以て最も親密なる状態であるから、即ち念佛三昧には不離佛值遇佛にて、不離の心想中に常に大なるみおやより心光に養はれつつあればこそ、つひに靈性成熟して常に麗はしく法喜禪悦の美味を飽くまでに食ふ身の幸を得たのである。

若し柿の實が中途にして落ちたならば味も何もあつたものでない。その種を蒔いたからとて萌發する筈はない。

それで成熟してから落ちるのは彼は還つて有てる性分を萌發して親木のごとく成ら

んとの目的なればである。

三

キラ／＼と朝日の輝く中に最と愛する處の靈相の麗しき幻想が影現する。
其面いと靈しき容は靈愛の客體現なのである。其靈しき妙容を想ふ時は身も神も融液して實に不可思議である。

聖善導は凭やうに言はれた。

阿彌陀佛眞金色にして圓光徹照して端正無比なるを想へよと。

此肉體に對しては赫々たる日光ほど威力と恩寵との廣大なるものはない、太陽は我生命の源である。

靈界に常恒に輝ける如來は吾人の心靈の太陽である。是が吾人の心靈の生命なのである。其如來は威神光明赫耀として吾人の心靈に儼臨し玉ふ。

吾人の心靈は本大靈の分身である。

分身たる靈性は恰もニクルイ樹の果の様なので實には大樹と成り得べき性能が具有して居れども、之を養はざれば大樹と成ることは出来ぬ。

大靈の光明に萌發してつひに心靈の花開きて見ればいつも大靈の光明と吾人の心靈とは相映じて恰も太陽の光が金剛石に反映する如くなのである。

世に愛と云はゞ大靈ばかり愛なるはない。大靈は無上の愛を常恒に我に注ぎつゝあり。

いかでか我れ彼を愛さで居られやう。

四

此頃の蟬の鳴く聲を聞くにつきて自づと思ひ出づるは彼の法然上人の

阿彌陀佛と心を西にうつせみの

もぬけはてたる聲ぞすゞしき

との御道詠の意が何となく懐かしくぞ感じられて候。あの蟬はもぬけ殻からぬけ出でて中實はいかにもいさぎよく聲をすゞやかにうたふてをる。私共も一心に念佛する時に此身はむくろの如くになりて、神はかのみだ尊のなかにぬけ出で我を離れて、あみだが我が我があみだかとまでに成りて稱ふる時の心はいかにすゞやかなのでせう。其ころのいかにもすがすがしが自づと聲にもすゞやかに發することにぞ有りけれ。それとは反對に口にはあみだ佛と唱へ乍らもころはよ所事にのみ構へて居るときは、それは中實のなき全きもぬけがらの稱名にてぞ。否たとひ尊きみほとけが在まさぬのみか還つてくさくの雜念妄想にのみ耽りていたづらに口をのみ費すことにこそなりぬ。されば聖法然上人の念佛のみだに深くしみくとほれ込みたるころの内こそ床しけれ。實に其阿彌陀佛に神を遷したる上人の心は宛がらみだに異ならず。さればこそ世の人々が形を見れば法然房まことは阿彌陀如來と仰がれしも實にもとこそ

おもはるゝ。

上人は形は人間なれども神はみだ尊に同化して金剛石のごとくなれば、そをまこと
はみだ如來とこそ稱しけれ。

さかえ子のきみよ。

みだ世尊の光明は普ねく平等に照りわたりますも、こなたが其光明に接せんが
爲に、其光明の源にまします彌陀尊に眞正面にまむきに成りてこゝろを注ぐ時は、
あなたのみこゝろの光はこなたの胸中に照り來りて、この心がいつしかあなたのみこ
ゝろと同じやうに化しぬること疑ふことなかれ。

さかへ子のきみよ世には眞の心のミオヤの聖名だに知らずして空しく人世を聞のな
かに葬つてしまふ人こそは實に憐では有りませぬか。凭る人も皆大元を申せば同胞で
あるとおもへば、何人にも慈悲のミオヤの聖意を知らせ度でこそ。また世には日に幾
千萬遍となくミオヤの聖名を稱へ乍らも心には左のみにミオヤをしたふともなく唯死

後の幸福の爲にのみ稱名する人も矢張り氣の毒な信者であるとおもふ。

南無阿彌陀佛といふ其真正面に彌陀は現に在ますなり。若し彌陀尊が在ますぬのに御名をよぶと云は無意味の事にて候。吾らは彌陀尊の在ます爲に非常な力と爲りまた最も頼もしく感じらるゝ事にて候。

五

心本尊と申すことは吾曹が心中に何時も離るゝことなき活ける本尊さまをおする申し置く事にて候。例へば本堂の中心中臺に御尊像を安置する如くに、私共の頭の中臺にみだ世尊を安置して常に其活ける本尊の威神と慈悲との光明に照されて、邪と惡とを捨て正と善とに御みちびきにあづかるなり。我らが心本尊には、吾曹の面前の如來は萬徳圓滿なる絶對人格にして我らが真正面に在まして圓かに照さるゝを想へば、我らが如き淺間敷心も自づと清くまた高く靈にありがたき心も湧き出で候。

威神の光明赫々として我等が眞正面に在ますことを想ひ奉れば、私共は自づと歸命頂禮の心が起きて何とも唯尊とく感ずるなり。

また彌陀尊の慈悲に充ち給ふ御すがたを想ひ上げれば何とも云はれぬしたはしさとかたじけなさを感ぜざるを得ぬことにて候。

吾曹活ける本尊を常に安置し奉つる身にしていただきしは實にありがたき事にて候。さかえのきみよ。あなたの心のうちに本尊さまが常に在ますのでありませう。私の

今こゝろに在ます本尊さまも同一の本尊さまにて候。

釋迦如來が御涅槃に入りなされ玉ふ砌り、御弟子がたが御わかれをかなしみて深く嘆きて申上奉るには、若し如來さまよ、あなたが御かくれの後にはどなたに御たり申して私どもはあなたの道をたどる事にいたしませうと、たづね奉りければ、其時に世尊はかやうに仰せられ候。假令我滅度に入るとも汝等が一心に念佛する時に、如來の法身は汝等が心中に在まして常に汝等を指導す、我世に住すとも異なることなし

と、告げ玉ふた。左あれ、さかえ子のきみよ、我らが世尊は汝等が一念佛する處に眞佛法身は常に在まして汝らをみちびき給ふと仰せられたり。

有がたき事に候はすや。

此程あなたの深き御志よりして我らを常に離れず護らせ給ふ大悲のおやさまの御すがたを寫してよとの御請によりて、折角の御厚志なれば受け申置候。何れ歸京のち御寫し申上て御送り申候間左な思ひて玉へよ。

是より御良人たる師のきみには道の爲に廣島にまで同道いたすことなれば、御留主の中定めて何かたの御心配りも千々にくだかるゝことならむ。是また御佛に仕へ奉る身の御内助として暫らく御力を添へ候はんことをこそ願はしく候。尙くさく申述度事多々候へども後便に譲り候。

もはや今年もわづかと相成候。さて世の人々を見るに折角人間に生れて人生の歸趣を自覺せず唯空しく闇から闇に入るものゝみ實に淺ましき事と存じ候。願くば獨の大みおやに在ます

無量光如來の光明を仰いで靈に復活し一切諸佛賢聖と同じやうに無量光如來の不可思議の德を稱揚讚歎するやうな人々を多くあらせ度く候。

實に一切諸佛が咨嗟して無量光如來を稱讚して止まざることよ。此光明にあふ者は何人か讚歎せざらん。

永恒の光明中に在りながら己が心のやみにまどふて日々に空しく此かたちの生命を一日々々に枯らして仕舞ふの愚さよ。

稻草は一日々々に死の方に同く枯れてゆくけれども、稻實は日に／＼に生きる方／＼と實のりてゆく。

太陽の光を被り我らが形は一日々々に死ぬ方／＼にあせつてゐる。心靈の實は生け

る方生ける方に實のりて来る
如來大靈光の恵みによりて。

七

永遠の光明裡には春秋とてはなきものゝ、さあれ一面にはめぐり來りて改たまりし
歳を超えて兎まれめでたき春にこそ。今歳は寅年の猛き威力を暴動せしにもあらざら
なむも聞くも傷はしき西南の慘狀、罪なき吾同胞をいかなれば斯ばかりに酷なる事に
なせしぞとおもへば、天を恨めしくも存せられ候ものゝ、そは幼き子どもごゝろのあ
さましき愚痴にてあらむ。大なる御みはからひは智慧なき子らのはかりしる處にあら
ず。ただこれに付いてもおもふは折角此世に出し身に大みおやの恩寵のほどを知らし
めて有爲無常の此世の一面には常住不變の存在をさとらしめ、限りある身に量りなき
靈の生命を自覺せしめ、せめての事に大みおやの聖意をしらしていかなる境遇のなか

にも大慰安だいゐあんのあることを得えさせたまひにこそ。

八

大みおやの光明裡くわうみやうりに麗うるはしく御くらしなされ候哉さうや。永ながらく御無音申譯ごぶいんをしわけ之これなく候さう。漸やうやく今日こんにち歸京候きけうさう、北越ほくえつ及び關西くわんさい到いたる處ところに敎育家けういくかの爲ために講演かうげんを開ひらく事ことに相成あひなるに至いたりしは全まったく大みおやの辨榮べんえいの徹衷ていちゆうを容いれさせ玉たまひし事ことと深ふかく感謝かんしゃしつゝとめ申上候まをしあげさう。其そののち云何哉いかにや。御地おんちの御容ごよう子聞すきがまほしく存候ぞんじさう。ねてめさめても唯大みおやの光くわう明みやうの中に住ぢする身みの幸さちを悦よろこぶと共にすべての人々ひとに及およばし度たくあせれども中々なかまゝならぬことよ。

久ひさしぶりにて

大みおやのうはさを述のべませう。就ついて此頃このころ大分世間だいぶんせけんで囂やかましく云ふタゴールの心しん靈上れいじやうの内容ないようを密ひそかに測はかることも出来できぬが、中々なか深刻しんこくに造詣ぞうけいして居ゐる様に思おもはるゝ。容よう

子を見るに吾人が言はうと思ふことを中々に巧みに言ひ顯はして居る。矢張り彼が大みおやに對する信念の中心は愛である。彼が自己と云ふものには二の方面あり、一は自己を實現する自己にて、一は自分を超越せしめて其處に自己の意義を光すのである。甲はより大ならん事を欲求し、乙は凡てのものを犠て蓄から笑ひ出た花の様に芳を放つ。喩へば洋燈の油壺に油を容れた油は外と全く關係を斷て閉籠つて居るけれども火を點すれば其意義を表はして外界と切ても切れず煌々と照して居る。而して其燃ゆる爲には資力の油を犠牲にして居る。吾人が自己の貯へた精力を固く藏ひ込んで動かさなくば闇黒であるけれども、吾人が眞我に燈火を點じた刹那から自我を通して輝き亘り、而して凡てを燈火の犠牲とする其燈の中に啓示があるから、それは佛陀の所謂自由である。佛陀は人間に向つて其持つて居る油を悉く盡せと仰せられた。それは明るくする爲にである。油の中に持つて居る眞の目的を充分に發揮せねばならぬ。是解脱。はとけである。佛陀は無我と云ふも實は大我なので、愛の眞の擴張を教へた。佛

陀の涅槃は愛の絶頂である。何故なれば、愛の究極は矢張り愛である。吾人が心に『何故か』と云疑ひに、『愛するが故に』と答へたなら、それ已上に何故に愛するかと云ふ様な疑問は起らない。これ愛其物が總ての終の答だから』と已上タゴールの言である。吾人如來を愛し眞實に愛する時はどうしても彼と離れようとは思はれぬ。どうしても彼を斷念することはできぬ。たとへ死んでも彼と離れられぬ。彼とならば共に地獄に陥入るも甘んずる。

眞實に彌陀を愛する心念がすべてに超えて強からば身命も惜くない。彼が爲になら如何なる苦も甘んずる。彼と共に地獄の中に入るとも内心に樂みあり。眞實に愛する彼はすべてに超えて美しく見ゆる。彼は善である、美である、眞である。眞實に彼を愛する心ならば如何にして彼を悪く思はれよう。うそと思はれよう。愛する我は彼をすべてに超えて愛する。吾人がすべてに超えて愛する彼は世のあらゆる凡ての物よりは美しい。常に彼と共に居るほど樂い事はない。

彼れほど善なるはない。其故に我は愛すると共に我すべてに超えて愛するが故に善く見える。

若し人ありて何故に汝は彼みだを愛すると云はば矢張りタゴールが云やうにである最も愛するものと共に離れぬほど楽しいことはない。又幸福はない。我はすべてに超えて愛する彼と此世も後の世も寢ても寤ても離れられぬ。たとひ水火の中でも彼と共になれば辭せぬ。故に我は彼と共に斯道を宣傳へます爲には苦を感じたことはない。我は愛する彼と共に共なるが故に幸福である。彼が居る處は地獄も變じて極樂となる獄火變じて清涼の華と化す。

信あれども愛なくば鳴らぬカネの如しと。

九

大ミオヤの聖意にきよめられたる吾同胞よ先つ頃大垣にて別れてよりおもはざるな

し。今は大みおやのいと暖なる慈悲に充されたる家庭にありて共に相たすけて、ます
く信念の花の、いや榮えあらんことをこそ祈候。貴家にある妹と脊よ。きみらは觀世
音とまた勢至との心意と行爲とを以て、あづけられたる女らを誘導すべき大みおやの
命令を忘れ給ふならざるべし。其馥はしき花笑る家庭にありて、朝な夕なに於て清き
聲を以て大みおやの光明の徳を讃歎し、また朗らかに息心一致の禮唱の聲は親あた
り聞くがごとくに覺られ候し。

十

極樂は無爲泥洹の都とは導師の常に釋せられし處、また經には國泥洹のごとしと説
給へり。泥洹とは本來常自常然の靈界、無始無終にして本有の都、一切諸佛は泥洹即
ち大涅槃界を以て常住のすみかとし給へり。大涅槃の靈界は釋迦大聖無上正覺のあか
つきに證得してより一代教化の歸趣は涅槃の光明界に入るべきことを教へ給ふ。釋尊

及びすべての聖者が證入する處の涅槃界は、常樂我淨四德莊嚴の境、眞善美の極まれる處、阿彌陀如來の安住する處にして、吾人も理想に於て住する境界なり。吾人が理想に安住する處の靈界は絕對にして無碍。また不可思議なり。此絕對の靈界は清淨無比にして至美の靈界なれば清淨國土と名づけ、また美天國とも云ひ、如來法樂の快樂安穩の處の故に極樂また妙樂世界と名づけ、或は常寂光土とも云ひ、無量光明土と號けまたは智惠土と曰ふ。または蓮華藏世界とも密嚴淨土ともいはる。名は異にして體是同じ。涅槃界は絕對にして方所なし。一切處として涅槃ならざるなけれども、衆生は唯生死の方面のみを認めてまた生死界とし、即して不生不滅の涅槃界なることを識らず。涅槃常住の靈界の外に求むべき目的なし。いかにして生死に即して大涅槃に入ることを得べき。

三昧無爲即涅槃とは是導師の讃文なり。さすがは極樂の先達なる善導大師なればこの眞理を悟り給ふ。三昧とは即ち念佛三昧なり。一心にみだを念じて我を離るるときは我即ちみだなり。若し念佛三昧を得れば絶対みだなり。宇宙全體みだならざるはなし。これを三昧の境と云ふ。彌陀の外に一物なきに至ればみだは即涅槃界の主なり。無量の光法界に周徧して永恒の壽三世常然たり。徳本行者が、天はかさ地は足駄なり徳本が胸は六字の都なりけりとは同じく此三昧無爲即涅槃の消息を洩されたり。

十二

吾祖聖法然が淨土宗を立つるに師の道綽に依らずして善導に依るは何故と云ふに、導師は三昧發得の大師なるが故なり。若し唯經の文に依つてならば綽導何を別あらん然れども導師は經文に依るにあらずして彌陀の眞理を實驗せるが故に導師に依ると。聖法然もまた念佛三昧の眞理に於ては實驗の人なり。實驗と云はゞむつかしきことに

あらず。唯^{ただ}みだ大^{だい}心^{しん}光^{くわう}中^{ちゆう}の我^{われ}なることを信^{しん}じて疑^{うたが}はざるなり。大^{だい}光^{くわう}明^{めい}中^{ちゆう}に生^{せい}活^{くわつ}する心^{こころ}は法^{はふ}悦^{えつ}を感^{かん}ずるなり。如^に來^{らい}の慈^じ悲^ひによりて靈^{れい}活^{くわつ}するなり。宇^う宙^{ちゆう}全^{ぜん}體^{たい}みだならざるなきの實^{じつ}感^{かん}なり。清^{しやう}淨^{じやう}光^{くわう}にきよめられ、歡^{くわん}喜^ぎ光^{くわう}に生^{せい}活^{くわつ}し、智^ち慧^ゑ光^{くわう}に照^てらされ、不^ふ斷^{だん}光^{くわう}に働^{はた}らく心^{しん}行^{ぎやう}是^{これ}なり。大^{おほ}ミオヤを眞^{しん}におやと思^{おも}ひ己^{おのれ}は眞^{しん}にみだの子^こと想^{おも}ふ心^{こころ}なり。彼^{かれ}を愛^{あい}して忘^{わす}れんと欲^{ほつ}すと雖^{いへど}も忘^{わす}れざる情^{じやう}なり。

十三

三^{さん}昧^{まい}とは物^{ぶつ}我^が無^む二^に生^{しやう}佛^{ぶつ}一^{いつ}致^ちの心^{しん}理^りなり。光^{くわう}明^{めい}讚^{さん}稱^{しやう}の時^{とき}は讚^{さん}聲^{しやう}に神^{しん}が入^{はい}つて聲^{こゑ}と心^{こころ}と共^{とも}に佛^{ぶつ}となるなり。無^む量^{りやう}光^{くわう}の聲^{こゑ}に心^{こころ}も佛^{ぶつ}心^{しん}と相^{さう}應^{おう}することなり。讚^{さん}禮^{らい}の時^{とき}は即^{そく}心^{しん}と佛^{ぶつ}と一^{いつ}致^ちして、無^む二^にとなることなり。日^に光^{くわう}を見^みれば日^ひと心^{こころ}と冥^{めい}合^{がう}す。然^{しか}らば日^に光^{くわう}もまたみだの光^{くわう}明^{めい}と觀^{くわん}じらる。風^{かぜ}の音^{おと}と融^{ゆう}合^{がう}すれば松^{まつ}風^{かぜ}即^{そく}淨^{じやう}土^ど寶^{ぼう}樹^{じゆ}の音^{おと}と調^{てう}べを和^わするなり。一切^{いっけつ}の行^{ぎやう}として佛^{ぶつ}行^{ぎやう}ならざるはなし。行^{ぎやう}住^{じゆう}坐^ざ臥^ふ、着^{ちやく}衣^い喫^{いき}飯^{はん}、放^{ほう}尿^{によう}放^{ほう}屎^しとして苦^く薩^{さつ}行^{ぎやう}な

らざるはなし。一切所作即ち念佛三昧と成るなり。先以て三昧を學び給へ。

十四

きよきによりて愛する處の　　きみよ。きみは大ミオヤよりえらばれて世の爲に
活る宗教の範となるべきつとめを、果すべき命令せられしことを忘れ給ふなかれ。い
ける觀音と成りて、宗教家の内助者たるべき天職の、實に神聖にして光榮あるつとめ
を、なすべき事を常に心に懸け給へよ。新らしき福音は、天地ひらけて靈界よりひと
き來れり。此靈の福音の無線電話はきよき信仰の心に感受せらるべし。君よこの靈的
電話の交換手の職を命せられたることを自覺し給へよ。

十五

光明土は近づけり。將に淨土の門は開きて此娑婆に接續せるの時至れり。

既に開放して天界と人界と接近するの教は益々日の出のごとくに熾んなるに至るべし。

大ミオヤと子と本現在に於て不離と値遇の難きに非ず。之を遠ざけるものは大ミオヤと其子たる衆生との間にありて、紹介の勞をとるべき舊、偽宗教家のために却て遠ざけられて、生佛の關係を親密ならしめざるによるなり。

越の雪に凍へて將に靈に死なんとする青壯年のために、從來西と東と現在と未來との空間と時間とに於て隔てられたる教の鐵壁を破壊して、いと暖かなる明かなる大ミオヤの光明を此土と現在に被むらしめて靈に復活せしむる重任を尊者は負はざるべからざることを自覺し給ふ哉。

尊宿にして、越の雪に覆れんとする青壯年を、暖かなる光明の道によりて救ふにあらざれば、孰れか能く此門を開くべきぞ。既に日出で、三竿たるを識らざる頑迷なる舊習を墨守するの徒に引留められて、爲に有爲なる青壯年を空しく靈に凍死することを傍

觀するに忍び給ふ哉。昔の南都北嶺の僧徒の如くに舊習を株守するの輩を敢て非難するにあらず、唯大衆衣のまゝにて、當時の人民が靈に飢へて死なんとするを見るに忍びず、之が救済の道を講じたる聖法然祖師の意志に倣はむとするの同志の輩出を望んで止まざるものなり。

我國民も稍半面の文明を見るに至ても未だ内面に光明を得るに及ばざるは遺憾なり。

學校教育時代は幸福の兒童なれども、宗教教會の指導なきは憐むべき國民なり。

死んだ後はいざしらず、生ける精靈は餓鬼たらずんば畜生たり。たとへば秋の末に藏の中に入りては米になるかはしらざれども、春から夏秋の田圃は稻にあらずして雑草のみ。雑草に米の實を結ぶてふ佛法の現に行はれつゝあるは、因果律をいかに解してよろしきかに疑はる。

其後云何に候哉。

大ミオヤの聖意の然らしむる處、時到り光明主義到る處に行はれ候。(中略)

光明主義の基礎を堅めんが爲に、また發展の爲に傳道部教育部を要し候。當麻光明學園生徒わづか五十名位將來は傳道師養成場にいたし度候。此度も檀家總代等が切に學園の爲に心配いたし吳候。

田中氏の勞により宗大生との連絡も彌まとまり候へども、將來は長く連絡はむづかしく候。矢張こちらはこちらで傳道師を養成いたして、志の有る者を各宗より吸集するやうに致したが將來の策と存じ候。

すべての傳道機關の設備を要し候。

十七

其後は御無音候。再びまで御書に接し大に難有感じ候。

韓國傳道の準備の爲彼此いたし候。

まづ他事は兎まれ角まれついに過ぎ去つて仕舞ふのである。

疾く 如來の光明に依りて目覺むべき宣傳に従ふ計りが設け物である。

十八

御書翰拜見候。宗教宣傳の最とも今日の急務は普遍的に光明生活に自ら入り人を
して信入せしむるにあり。

依つて各 大ミオヤよりの天分あれば其分に應じて使命を果す處に眞意義あること
にて候。

十九

此程は土屋氏の結婚式を光明主義の儀式を以て執行候。信者の中にも青年の相

當な人物、其儀式を見度いとして來會す。

儀式の順序は先般植木のと粗同じやうにして讃歌と宣疏は新たに造り候。夫から蠟燭の火を戒師より新婚者に傳へ、新婚者が兩方より來客に燭火を展轉して傳へ、其れに先だちロウを來客全部にくばりて置いて、それを左の手にもち、右の手に讃歌の本を持つて、一同の唱へ仕舞に、花を客にくばり置きて、已に臨んで一人立つて新婚者萬歳を唱へると、來客一同が萬歳を唱へながら各その花を新婚者に投げて祝意を表す。是華燭の式の意義である。

來客の燭は小カンゲにて全部齊く照しての光明中の聖意の意を表す。

二十

いかにあつくもあつければあついほど 大ミオヤの御恵みがあついと存じ候へばあつさもありがたくまた涼しい風もありがたし。

二十一

いつもく徳川末路を偲ばしむるは、舊式になづみたる御坊さん、即ち御金を以て僧位を買つて僧正とか緋の衣を本尊と仰ぐ如きは兎まれ人格は扱置き緋の衣と金欄のケサがいかにも有がたく尊くおばあさんたちに仰がれ申候。

志深き志士仁人は路をたづねて第三期の光明主義に來り候。
眞宗の僧侶がだんく入り來るには實に感ずる外之なく候。

二十二

欽啓昨八月來、北越より伊勢美濃をめぐり云何にも久しぶりにて傳道し、漸く本月一日歸京候。東京に來て見ればふるひたる舊佛教の連中、相變らず空祖當時の叡山の僧黨のそれと同じく、我國民の心靈上のことには毫も意に介する處なく、唯己が野心

を遅し己が肉あるの外何の考もなく實に言語道斷のふるまひにて候し

天は我國民の腐敗を救はんが爲に新らしく芽を出す兆候は見ゆれども、そは神道側に候し

二十三

此頃いかゞ候哉かねての月刊の雑誌は來春は發行する事にいたし度候。ついでに全く世の爲に成やうな事は

大ミオヤの聖旨より自己の胸に浮び出したる事は、するようしか心懸け置下され度候。せめて四五分丈は原稿を書ためて置いて發行する事にいたし度候。(以下略)

二十四

光明主義の益行はるゝに到るは、一に大ミオヤの聖意にかゝるものとして大に

感謝する處に候。(中略)

無量光寺法主様と云ことはいけません、矢張り光明主義の一兵士にて候。無量光寺は唯光明主義の一教會にて候。同所に光明學園を開き候。(中略) 將來は傳道を志す者にて、學資の耐へず中學の教育を受たき者にして補助を與へて教育する様に方法を致度候。現在五名有之候。

當麻に教會堂を設立し、十五日より三日間開會式を舉行いたし候。當所に於て十餘名の白衣の弟子をつくり候。當所を中心として地方の光明主義宣傳のつもりにて候。當麻も先日、授戒と云ふ名目の下に光明宣傳候。こゝも發電所に相成申候。(以下略)

二十五

年已に新らしく相成候。舊のふるき肉のとは、いくら重ねても唯煩惱の垢が増すばかりにて、いつ新らしく光明のなかの功德をつもるべき。かく外からは毎日毎

日太陽の光に照らされ、中は如來の光明に照らされ居ることを思へば、空しく唯肉の年ばかりをかぞへて居ること。

二十六

如來さまの御慈悲の面かげは常に彷彿として目前にちらついてましますか。

如來は晝も夜も永しへに慈眼を以て見給ふてまさすや。

如來のあたたかなる慈悲の和氣に梅香のかぐはしき如く家庭の花は咲匂ひますや。

(以下略)

二十七

外衣を装ふよりは内味の妙服を嚴にせよ。傲慢の髪を除きて謙遜にして道を求め、剛石の上にも六年の勤苦を経て靈性を鍛へ五濁の汚を靈なる流にて浴ぎ人間を以て神に

近づくに随つて、禽獸も尙親しむばかりに一心を金剛石に座して靈性の開發を期せよ。内に煩惱の魔あり、外に誘惑の回るあり。之を降伏して初めて靈なる光明を發見せん。此靈性開發こそ人生の一大事である。靈光喚發して心靈の曉とならん。

自ら靈光獲得せば即ち光明中の人なり。

自己の得し光明を以てすべてに及ぼせ。

其遊歩の行爲言口——世界を動かす。

二十八

十六正士は大乘の學道の學生たち。斯らは青年求道の標本である。普賢大士とは、上作佛の心と下衆生を誘はんと志を發したる健士、學生らの倣ふべきものである。斯學生らは前途に光明を認めて無量の希望と理想を實現せんとの活氣に充され、すべての功を積み徳を累ねんとの心意を安へて、十方に遊びて妙手段を講じて人類を光明に導

かんとす。それには自己の胸中に佛法を藏めて盡さざるはない。

是よりは釋迦佛陀の此世に出たる經歷を擧げて學生らの道に入るの範を示す。

初めトソツ天に在て正法を宣傳し、次に地上に出で、はカピラエの淨飯王を父とし、

母マヤの胎に神を降し、ラビニ園にて右脇より生れし如く、學道の士は靈の喚起覺醒の

曉を経て、初めて眞の道をうる。是無上道心の發生せる期である。此志が頓て靈開發の

元因となる。内に養ひつゝ外面的生活の算計文藝等のすべての科學及び技能をも修

めざるべからず。遊技も野球も兵役も辭すべきでない。教祖が爲れし如くに悉く爲せ

よ。而も勇悍にあらん限の力を竭せ。色味即ち結婚も正式に神聖にせよ。是れまた造化

の命である。然れども膏肉の生活を目的とし、また科學萬能主義に陷るなかれ。尙進ん

で靈性開發の向上心を發せよ。肉には老病死あり。不死の眞理を發見せよ。國と位より

已上に自己の中心點を安住せよ。世界動機の名譽財産等を超えて靈的動機に自己を規

定せよ。名譽財産を捨て、山に入れと云ふにあらず。それらの奴隸になる勿れ。精神

的に山に入れ。眞理の光明を發見せよ。靈性を開發せよ。勤苦六年に倣ひて自ら求道せば必ず得べし。自己胸中の塵垢を自覺せよ、靈なる金流に沐め。一心に皮骨連なるまで腐心せよ。道に焦がれて憔悴せよ。斯關門を経て初めて大心界は開示す。

二十九

全體外界の萬物に對して各自は自らの心から種々に觀じて居る。また感じて居る。彼のタボールが、世のすべての物は皆の喜から現はれて居るものであるから吾々も常に喜を以て日ぐらしすべきであると、實に然であると思ふ。吾人光明主義の所觀にしては、宇宙一切萬物若しは有情若しは非情又は依報又は正報一として如來光明の顯現ならぬはないと觀じらるゝ。天地も萬物も皆清淨と歡喜と智慧と不斷との顯現なので、またその働をなして居る。

先づ朝寤さめ東の方より昇る旭日のさしのぼる姿色を瞻ても、清らかに新たにいか

にも快活に、海の水で貌を洗つて、而していかにも御きげんよき御目ざめの御貌はほんとうに清淨光の權化とより外に思はれぬ計りか、實に歡喜に充ちみたされて、其の歡こびの光は六合に輝き亘るまでの熾んなことよ。實に歡天喜地とは此事かと存じらる。而して今まで闇黒で、どこに山が有るか川が在るか一向わからなかつたのが、智慧光の現はれなる太陽の光が放たれると、一目瞭然と、何もかも能く見わかちが、ついて来る。して見れば全く彼は智慧光の顯現として、外部に現はれた智慧光に外ならぬ智慧が物界に現じては、萬物を明らかに啓示して呉れる明りにて、之を精神界に現はれては、物の事理を認識し辨別する處の心の光、即ち智慧である。また彼は不斷光の顯現であるから、常恒不斷にエネルギーを放ちて暫くも休むことなしに活動して居る。能く觀じて見れば、實に太陽は清淨歡喜智慧不斷の顯現とより外におもはれぬ。また眼を轉じて植物界に注ぎて見ても矢張り然である。年ごとに春には新らしく萌して、新たにしてまた新たなるは清淨にする爲なので、清く鮮かに萌發したる新緑がいかに

も快活に而も ではないか。嬉しさうな貌で現はるゝではないか。矢張り歡喜光がらどんな細な綠葉でもないやな貌をして芽はへ出す物はない。而してまた智慧光の離れない證據には、どの葉でも、はてな俺は葉であるけれども、どんな姿にしまた莖やそれから恰好までどうしたら好いかしら、わからぬと思はずに、チャンと葉は葉としての面目を全うして、植物は理學上の智識を完全に有て居らなければならぬまで完全にできて顯はるゝ。而して不斷に少しも休止なしに、冬の間も木の中に有て潜勢力を養つて、それから萌發しかけても暫くも休みなしに夜も晝も不斷にのびて居る。地球でも然である。毎日々々清淨になる爲に、新たに夜が明けては、また新しき日を眺めたり、而して歡喜ばしい心で巡りて、然して何萬年たちても智慧が老耄もせず自分のすることを忘れぬ。巡環の時間も方角も毫も誤りがない。彼は時計も磁石も無けれども、能く間違なしに行てゐるのは、智慧光の顯とより外に思はれぬ。而して此地球は幾千萬年の昔からかは知らぬ、一日どころか一秒間も休息なしに不斷の活動をして居る。

我々のからだも本々大御親の御子である清淨歡喜智慧不斷の顯現である。

先づ生理上から見ても、此私共の生ける働らき細胞組織なるものは、毎日々々新たにしてまた新たに新陳代謝して居るは、新らしく清らかにする爲めなので、それが順調に清く新たに成ゆく原をも毎日朝と晝と晩と新たに御膳の上に顯はれる。清らかにそれを攝取するとうまい。歡びに迎へられて一箸毎に新しく一咀毎に歡の味を感じられる、不斷に連續して咀嚼せられ口から喉を経て胃に送り込む。而するとまた智慧の必要を感じる。いかにとなれば胃に送り込まれたる雜物中に蛋白質も脂肪も纖維も水分も混然として居る。此から之を分化作用して、之を血液とするので、それから消化作用もチャンと間違なしに血液としまた肉とするし、すべての身體組織を養ふつとめをなす。能く心を用ひで見れば一として清淨歡喜智慧不斷の働を離れたるものはない。此に就ては我々の心は大ミオヤの聖寵を我心とし、常に新たにして新たに、新鮮なる活氣に潔よき心を以て、澁くしたり滯々したり腐敗さしたり不潔にしたりするのは、

全く清淨光の力に背くからである。

雨ふるのも矢張り空氣を清めるためなので、風吹くのも清める爲である。雨だつて天の悲の涙ではない、實はうれし涙である。風は怒つてごみちりを蹴とばして暴れ巡るのではない、うれしくて我を忘れて踊り出すと、木の葉でも花でもごみほこりでもそれにうかれて仕舞て共に舞つたり踊つたりするのである。

人間の身體を組織する細胞が、不斷に新陳代謝するのは新らしく清くする爲である。それなら毛孔から出る汗や垢は不淨ではないか。それは不淨だから身體から滌去りて常に身體には清く新しい物ばかりを以て、不斷に仕替るのである。天地はきたないごみちりでも糞尿も、いつの間にかまた新しい清らかな草や木の葉や花とし、また果として、而して人間をよろこばせるものにして呉れる。而するのに智慧が有るから別段誰にも教をうけずして具合よく化合し成生し百物成らしむ。

袖を出る雲でも矢張り清らかに、ムクムクと、いかに嬉しうに、天つ乙女が袖

を翻して舞ふごとく、悦ばるゝ計な姿で、而してチツトまじつとして居らずに、不斷に忙しなさうに働いて居る。我らも大ミオヤの心を心とし、いつも常恒不斷に元氣よく快活に潔よく働くときはおもしろい。我、しやばに在る間はしやば乍ら清淨歡喜智慧不斷である。また大ミオヤの任にくゝ働きて、いよくあまり古く成て清淨歡喜不斷の働らきに任しられぬやうに成つて、大ミオヤの命令として今度また新たに仕替へて新しき組織を以て、清淨歡喜不斷のつとめを果すに耐へらるゝやうにして下さる。

三十

物質主義の文明は、進めばすゝむに随ひ唯互に強者伏弱、迭相吞噬と云ふやうな工合で、唯々互に向ふの肉を啖み骨をかちり合ひて、樂しみか苦しみかしらず、それが業か報かしらず、命か非命かわからぬが、現に歐洲の野に無數の獸類がかみ合をして居ることは事實である。

おもふに輓近人間が、大ミオヤの御恩に活き働らき在ることを忘れ、己が使命をよ所にして、唯肉の慾を恣きまゝにして、大ミオヤの子たる同胞たるを忘れ傲情非禮、救ゆるに手のつけやうなきにいたる。そこで、

大ミオヤが人間から墮落して獸的性に爲りたる者共を懲らさんが爲め、人類の使命を自覺させんが爲めに物質慾の非なるを悟らしめんが爲に、斯はなされ給ひしにはあらすやとおもはれ候。懲果てざればとても目は醒めぬ憎みても憎むべきは獨逸の蠻行である。狂犬にかみ附かれたる白國人こそ實に同情に耐へず候。

またおもふに段々に物質主義の人心に病附たる内証がこゝに成つては、どうしても此大截治療治でなくてはとても全快は覺束ないといふので大手術に取りかゝつたのであるかとおもへば、本復したならば肉體よりは心靈が貴重である。心靈によりて大ミオヤの使命を果すのであるといふことが自覺されるとおもへば此大手術もまた大ミオヤの聖旨が彼ら相互の手によりて爲しつゝあるとおもはるゝ。これで人類共

がまだ自覺でさんければいよく罰が重くなるとおもふ。それでも必ず是からは大ミ
オヤの聖意を畏こむ者がますます多く成ると信じらるゝ。ナム

三十一

常寺に於て迷信の害と無能の僧の社會に無益なる理を發見した、云も參考の爲に話
して見よう。常寺の檀頭に郡内有數の財産家某なるあり。六十位の未亡人にて女子二人
あり。姉は三十九にて妹は二十八である。東京の或る高僧（今は死せり）を深く信じ
それと賣卜者を信じ、それらの教に隨て姉にも養子を迎へもせず。妹にも聲を取るこ
ともしてはならぬと云ふので、而して迷信に陥つて常に煩悶と憂惱の中に實に憐れむ
べき精神の生活をして居る。郡内一の財を有しながら郡内一の苦悶の日ぐらしをして
居る。そは全く迷信の結果である迷信の害甚しい哉。

無能の僧には檀頭が其迷信に陥つて生きながら餓鬼道の苦しみを受けつゝあるを目

前に見ながら、之を精神的に救済する事が出来ぬ。尤も此の僧の如きは唯瞞着して檀徒のキゲンを損せぬ様にして金さへ寺へアゲさへすれば足れりと云ふ主義である。實に惑と云ふも愚なりと云ふ外なし。

光明主義の眞理に耳を傾くる僧なし。實に闇黒の僧輩ばかり多い。凭る闇き心の宗教家に國民の精神を任せんと云ふことは得て望むべからずである。故に坊主と云ふは葬式追善のほかは顧みるものなき様なすがたにて候。また坊主の方でも教をたづねられてはわからぬ故、唯すゝむるのは先祖の位牌を大事にせよの一點ばりにて候。

現在にかような坊主を葬りて仕舞はざればとても開明の教會は得て期すべからずと存じ候。幸に世の有識者は此坊主を精神的に葬りつゝあることはまことに悦ばしき現象にて候。

大ミオヤ大靈光中何の處にか隔てあらん。しかれども吾人肉眼に見ゆる自然界は
 龜末なる方吾人が泥田の中で働くべき方面なので、働くも矢張り大ミオヤの力能と大
 恩寵との中なのである。一生懸命働きて米を取り入れて置くから今に年が替りお正
 月に成りて綺麗な衣服着て新たな年の御祝が出来るのである。

我らが此龜末な衣服たる體をぬぎ捨て法性常樂の身と着替えるのである。勝過三
 界道。畢竟如空虛の光明界の中に在りながら、自分と娑婆と見て居るのである。然れ
 ども働くのには龜末なのでよい。(中略)田舎のヂャバさんこそ舊年の厭欣主義にて
 有難がりて居るべけれ、中々有爲の人間は活た光明によらざれば精神的に信服せざる
 事に候。若し岩井上人に他日御面會あれば宜敷御傳聲のほど望み候。假令主義に於て
 は新舊相異りと雖も其所歸の如來所求の淨土に於ては同一にして、唯機に對する爲に
 教の上に於て、眞實教と方便教即ち別教と圓教との別あるのみにて、或機類の爲に
 は方便教によらざれば勞して功なく、また或機類の爲には眞實教にあらざれば信受し

難し。何れも皆大ミオヤに奉事するのみとなればなどか敵視すべきものぞ。内心に隨喜する處なり。其場合に依つて辨榮の主張する處をドンドン撲つて下さるも或は妙ならんと存候。

聖法然が宣ひし如く、時來りて行はるゝもの何人が停止せんと爲るも能はざるなりと。

現在を通じての永遠に向ふ光明主義は時機を叩いて感應す。青年の爲に歡迎せらるればとて亦老人に歡ばるゝ未來主義も必要なること云ふまでもなし。

さてそれは兎まれ此程來當寺に於て古來の大哲學者大宗敎家の哲學書を讀んで見るに先づキリスト敎のパウロの神に對する信仰もキリストを通じて神に對する愛を本とす。それから基敎の中興、佛敎に云はゞ龍樹とも云ふべきアウグステイヌスの信仰も神は精神の太陽なのでそれに對する愛をもて融合して清き生活に入るのであると。

愛情合一の神秘主義は神の大慈の救済に預らんが爲に専心に神を愛慕し凝思する時

は自ら邪念は滅し、今までの罪の心は夢の如くに消えて、神の慈愛に攝して慈愛の吹き込を得大慈悲に溶解せられ大光明に攝せられ直に如來の懷に入りて本性なる愛を味識すべしと。

又哲人のスピノーザも、眞の宗教的要求の満足は神に對する愛を完全に充さすことによりてのみ得らる。神を認識する事は神に對する愛を完全に充し得る唯一の途なりと。昔から哲人でも宗教家でも大家の信仰には神に對する愛念が強き如し。

何についても如來の御蔭と云ふことを専ら念じてねてもさめても大ミオヤ／＼と云つて居るうちに親子が親密に愛情が溫く成つて來るとおもふ。

三十三

大慈愛の光の裡に麗はしき生活をなされあらん貴家の家庭に彌光榮のあらんことを祈る。愚禰當九月初旬關西より歸京いたしわづか四日にして再び北越の地に赴き

越後と及び佐渡とまた山形市とをかけて三ヶ月餘に亘り漸く昨夜歸京いたし候。着いて見れば御心に懸なされて結構なる御土産の贈物に預り何とも御心盡しの程感銘に堪へず候。

其後云何に在られ候哉。

永しへに照らし玉ふ如來の光明の中に益々信念の色いや増り候哉思ふに、如來不斷光の力を仰ぎ朝に夕に如來の光明を讚美し稱讃してたゞ大光明を仰ぎ家庭的に共に――信念増進するやうにいたし、また信徒の家に於ても一日の中たとへ一度たりとも家族的に讃禮し稱念することをつとめあとは常念につとむるやうにするのがよろしいと存じ候。

異譯無量壽經（吳月支國居士支謙の譯）大阿彌陀經に阿彌陀佛光明の名は八方上下に聞知せすと云ふことなし聞知する者は度脱せざるはなし。佛の言はく獨り我のみ阿彌陀佛の光明を稱譽するのみにあらず八方上下無央數の佛辟支佛菩薩阿羅漢の稱譽

する處皆是の如し、佛の言はく其人民善男子善女人ありて阿彌陀佛の名聲と光明を稱譽するを聞いて朝暮常に其光明を稱譽して好く至心に斷絶せざれば、心の所願に隨つて阿彌陀佛國に往生し衆の菩薩阿羅漢の爲に尊敬せらるゝことを得べしと。

又支樓伽識譯の無量清淨平等覺經に、

佛の言はく、其れ人民善男子善女人ありて、無量清淨佛の聲を聞いて光明を稱譽し是の如く朝暮に常に其光明の明好なるを稱譽して至心に斷絶せざれば、心の所願に隨つて無量清淨佛國に往生して、諸の菩薩アラカンの爲に尊敬せられん。

斯様に異譯の大經には説示されてある故に、朝暮に如來光明の德を讃唱して心を如來光明中に融け込めば、死後に正しく往生するのみならん哉、現在より光明の生活に入る。

此程高崎の清き友の中にかやうに言はれた友があつた。如來の十二光の讃を友どちと同唱する時は自から無我の境に入つて神が淨土に栖みてあそぶやうになると。

我敬愛する處の大谷家の麗はしき家庭よ。朝な夕に清き御國にすみわたるやうな讃稱の聲を以て大ミオヤの靈徳を稱へてよ。

三十四

益々寒さに向ひ候折其のち御經過云何に在らせられ候哉。各地巡教、昨夜歸京候。承はれば其のちまた再手術ならざれば轉地療養いづれにか爲され候との事、就いて唯々御勸め申候事はどうぞすべてを大ミオヤに御任せ申上げて常に大ミオヤを念じ大ミオヤはいつも離れずあなたの眞正面に在まして慈悲の面をむけて母の子をおもふごとくまします。あなたは其のみをおもふて専らにしてまた専らなる時は、だん／＼と心が統一できて、あなたの心はみだの御慈悲の面にうつり、御慈悲の面はあなたの心にうつり、而するとそれがだん／＼深く入るに隨ひてあなたのこゝろはなくなりて、唯のこる處は御慈悲の如來さまばかりと成り候。

而して寢てもさめても大光明中にある身なればそれをも寢てもさめても大光明中といふことを毫しもわすれぬやうになされ候やうに御すゝめ申進じ候。

娑婆のいのちはかぎりありたとひ百歳の壽をたもつとも必ず去らねばならぬ世の中而して百歳の壽をもつとも若しも

無量光なる無量壽の中に生るゝ精神にならざれば何の所詮もなき事にて候。

たとひ地球上に満らん寶よりは最も貴重なる寶は精神に得る

彌陀の光明に依てみがゝる心靈の珠にて候。すべてに超て慈悲のふかきみおやのあなたの眞正面に常に在まして慈悲の御むねに在るあなたに注ぎ給ふことをわすれ給ふな。すべてを大ミオヤに任せ候へ。

三十五

好事魔多しとは古來の諺、

釋迦如來が六年修行いまに滿願と成りて正覺を成就せんとするに先だちて、天の第六魔王が襲ひ來りて有らゆる妨害を加へたけれどもそれをついに降伏して正覺を成じなされたと録されてある。

今皓月法尼が三經書寫の大願今に滿願といふに先だち病魔の爲に襲はれしと聞く。昔も今も相變らず好事魔多しの數に洩れぬ事、矢張り免れぬ世の掟とこそしられぬ。昨今の御經過云何に在らせ候哉深く御案じ申候願くは一日もはやく快方に相成候て發したる願望の成就する様にと

大ミオヤさまに祈り奉り候。唯々いかに切なき中にも天地の中に獨り慈悲深き

大ミオヤを便りなされて聖名を唱へて慈悲のみひかりのなかにせめて心の安きを得らるゝやうにこそ祈申候。

皓月法尼の法衣を纏ふて經枕によりて寫經三昧に耽りて世の魔境をよ所に見て唯御佛のみ心の深く染みこみしすがたは宛ながら千とせあまり昔の、當麻の奥に分け入り

て見佛三昧に深座し曼陀羅を感得したる法如比丘尼（中將姫の尼）のむかしをおもはれてゆかしくぞ。

願くは姿にあらはれしごとくに心の奥の奥底に常に大悲のおやさまをしかと秘めおきていか成る場合にも麗はしきを換へざるやうにあらまほしくぞ。贈物などの事ども兼て御断り置候ものを本意なきにこそ。

左あれ時しも暑に入らんとする此頃御身の保養をつとめて片時も疾く病魔を退げんやうに祈り候。

三十六

暑に入り彌嚴熱と相成候折

御不恙まだ御全快の運に到らざるよし、就てすべてを宇宙全體に慈悲の御手を廣げて慈しみをたれ給ふ

如來に一任して微塵ばかりも御自らの心を以て片時もはやく回復して此事をしたなら
杯と云ふ様な事はさつぱり放擲して仕舞つて彌陀三昧に入りなされ。

彌陀三昧と云ふことは、餘のすべてのこゝろを捨て一に彌陀の光明中に精神を投げ込
んでしまふことなのです。もう宇宙間は如來の光明に充ち満ちて一切の物は悉く沈没
して何も無い、唯大光明中につゝまれ攝められつゝ在るのみといふ觀念でありま
す。病氣なんか能くならうが悪くならうが其の様な物に待遇してゐる隙はないから、
いやならさつゝと出てゆきなされ、自らは一大事の大光明中の方に

如來さまを歡迎優待して自らは精神的に生れかはらしていたゞくと云ふ一生二代の
一大事の場合、また明日をまつと云ふ様な悠長な閑事業ではない、今日一日は盡未來
際またなき大事の日なれば、其つもりに取かゝつて居る念佛三昧の事なればと云ふ精
神にて修しなされませ。

病床の間處また三昧道場にて候。さて御申越の石碑の原稿認め御送附候間石工さん

に石に配附は宜しき様にして彫刻を願はしく候。

九月或は十一月にまた御目に懸る時が有るでせうから、とまれ辨榮に便るよりも本家本元の大ミオヤに直接に便りなされ。さればとてあなたをかまはぬと云ふのではない。どこまでもあなたを如來さまの慈悲の御手から離れぬやうにすべき使命をもつてをる辨榮なれば、必々あなたをはなちはせぬから、ますくみだ念佛三昧を修しなされ。

先にあなたに病氣にこゝろをかまひなさるなと御すゝめ申したのは、實は一日も早く回復させ度きまゝに申述べたることなれば、どうぞさうおもつて如來にたよりなされませ。先は御返事かたぐゝ如斯御座候。勿々

三十七

此頃殊に暑さが嚴敷候折、先般來の御病氣其のちの経過云何に在らせられ候哉あま

こころに懸り候まゝ御たづね申進じ候、くりかへし御すゝめ申すこと。

大慈悲のミオヤのみむねにまかせてたとひ御身體にはよしや惱みがあらうともころは大慈悲のみふところにすべてをおもはで一心稱名なされんことを御すゝめ申候。

先は何は兎まれ一心に

如來の光明の御名を以て

大ミオヤの御心のなかにすべてをうち込んできよきに安らかに心をもちなさるやうに

御すゝめ申進じ候

月日は休ふことなくすゝみゆき候

清淨光にきよめられ歡喜光によるこび智慧光にさとらせられ不斷光によつて日々念々に如來のみちからを力としてすゝまんことをこそねがはしく候。

昨今云何に候哉と案じ候まゝ御たづねまでに如斯御座候。

三十八

久方振にて懷敷御玉章に接し候。其のち云何に在らせられ候哉と御案じ申候。承はれば久しい間の病院就床いか計りか御退屈の事なりしやと存られ候。

きよさに愛する皓月のきみよ。

大ミオヤの如來さまはいか成る苦しみの裡よりもあなたを救ひ出さすば置かじの思召のかゝりあればこそ快復せしことなれば實にたとひ一時間一秒間なりとも唯徒らに暮してしまふてはなりませぬ心に常に絶對に尊とき如來を憶念して口に稱名を唱へなされ。天よりも廣い日よりも明らかに。

如來は空中にましくて晝も夜も永しへにあなたを照しなされますことをあなたは心の底に念じなされて居りますか。あなたの皓月といふのはたとへば月は元より光なし太陽の光が反映して冴かに照す淨満月ともなる如く、あなたの心は

あみだ如來の日の光が永しへに映寫する處の皓々たる月輪なるを名のる時、すべて如來の光明と離れぬことをすべきものぞとの信念は輝くことならぬ。皓月のきみよ、

あなたが日々三たび自心を省みて若しも

如來さまの光明のかゞやきを離れたならばあなたは自ら我は黒月なり晦月なりとよびなされよ。

如來の光明を心に離れたことなれば現世に於ても闇の中に暮して未來は永劫の冥々たる闇黒の中に墮することきまりて居りますよ。

あなたは眞に皓月のきみなのでせう。何事についても稱名があなたの奥底より出ますか。光明のおやさまを親しくおもひ上げなされますか。あなたが忘れて居らんとは思ひませぬけれども夫でも念を入れてあなたを導くのであります。十九、二十、廿一日には若松市安養寺にてつとめ申候。廿二日直方にて對面いたし直に歸途につき申候。御手紙の如くの御都合になされ候へ何れ御面晤に譲り候あらしくかしこ。

三十九

却説まておもん惟みれば時じくわう光くわうの遷うつりゆくこといと疾はやく今年ことしもはや四げつヶ月げつを經へにき。唯ただ淨じやう土ど無な量りやう壽じゆの御う國くにに心こころを掛かけて念ねん佛ぶつし、宗しゆ祖そ大だい師しのいけらは念ねん佛ぶつの功かうつもあり、死しなば淨じやう土どに生うれなん、とてもかくても此この身みには、思おもひ煩わづらふことぞ無なき、との御ご道だう詠えいありがたく感かんじ申まをし候しふ。

唯ただ願ねがははは大だい悲ひのおや様さまに御お任まかせ申まをして御ご稱しやう名みやうを御おつとめなされ候あふ事ことの尊たふとく存ぞんじ候ふなほ時じ分ぶん柄がら御ご自じ愛あい是これ祈いの候ふし。

四十

大おほミオヤの靈れい光くわうの裡うちにますくきよきに向かう上じやうし給たまふことまたなき悦よろこばしきことに存ぞん候ふし。

筑つく紫し路そに來きたりてきよき同どう胞ほうにめぐりあふことを得えたるはまことに嬉うれしきかざりにぞ。愚ぐ禰たなど如に來らの使つかひなどは意い外ぐわいの事ことに候まをへども、それでも永ながらくならくの底そこに沈しづ

みて何分かは改悟のありてか、大ミオヤを何となく慕はしく戀しくおもはるゝは、こりはてたる結果ならんかと存候。

四十一

清淨 光裡に新年を迎ひ不斷光中益々向上せられんことを祈候。
大ミオヤは此日本國民に靈的活路を與へ玉ふと喜び奮闘罷在候。
願くは筑前にある吾聖き同胞の益々光榮あらむことを望ましく候。

さよらけき光の御名をたゝへては

まづ新玉のとしを祝ひつ

大ミオヤの賜の時の貴とさを覺えければ、

またもなき賜ものでふる時と日を

たゞいたづらに過まじものよ

四十二

如來は神聖と慈悲の尊容を眞向にして一切の時、一切の處に在ます。今も此身を照鑒し玉ふなりと憶ひ上ぐれば、自ら恭敬の念生じ候。私共のやうな氣まゝものには、唯口に稱名する計りであると、尊敬の念も生じ難く候へども、絶對人格のいと尊き如來現に尊く嚴臨し玉ふ神聖なる尊容を瞻む想のなかには、自ら頭をたれて崇敬の念が起り候。されば人にすゝむるにも矢張り人格的の如來さまに離れぬやうにすると其方が宗教心確かに成ると存候。

四十三

如來の光明にきよめられたる心のうるはしさ堀朝枝嬢にまで贖しまゐらせ候嬢は令弟令妹を伴ひ、

大ミオヤの御前に跪つき、いと朗かなる聲を以て如來の靈德を讃稱し、また光明名號を唱へて、きよきみすくひを仰ぎ候ことの殊勝に候。光明界にまします大ミオヤさまに於いていかに御喜びましまし玉ふらんと存候し。

こなたは旅行中年來れどもいまだ新たなるを覺えず、新年の御壽はぎさへ怠り候處、嬢よりはいと優に麗はしき新玉の玉章に接し、殊にく殊勝に道を求めなざる、御志しのほど、いかばかりかうれしく存候。ついでいさゝか大ミオヤの御慈悲の廣大なることを申述まゐらせ候し。

ゆく末のめぐみとばかりおもひにき

もとより本のみおやなりしを

如來さまは此世おはりて未來に於て救ひ下さるばかりでなく、本來、如來さまには三身一體と申して、法身報身應身と分れたるものゝ、本々一の如來さまなれば、法華經にこのせかいにはわがものにていけるものわがこも三界吾有衆生は吾子と仰せられて、天地萬物も其本は如來法身の則によりて行は

れて居るので、我々も其御力によりて生れ活あるのである。實に天地萬物のあらゆる備を以て、我々をいかして下さる其目的は、何の爲にてあると申ば、此人間生涯に於て、報身如來の光明をうけて、この精神を大ミオヤの思召に叶ふやうな魂に、させて下さる爲にて候。如來さまは衆生のたましひの本の大おやさまにて、而して此人間界には難行苦行の修行せんが爲に出して下されたのであります。喩へば財産家の子供が、唯樂に飲食の生活ばかりならば學業も修行もいらぬはずなれども、それでは人間の資格が備はることが出来ぬ。また何の苦行もせざれば親の御恩もわからぬのである。如來の大おやさまも、いかに御慈愛が廣大にても、始から御膝もとにて自然の快樂うけたのでは、快樂も何ともわからぬ。依つて此人間界に出して艱難困苦の修行も出来、またあらさびをも取りのぞきて、而して清き樂しき御許に歸るときは、初めて大ミオヤの深き御慈悲も深く感ずることになるのである。

されば朝枝嬢よ。人間は一生が學校であるから、大ミオヤの思召にかなふ人に成る

やうに其つもりで日々の事を、はたらくやうに爲し玉へ。如來さまの御試けんは日常の何を爲す業の中にも、あることを忘れぬやうにし玉へよ。

尙々述度存候へども、時間にせまりしたため後便にのこし置候。あらくかしこ

四十四

如來光明中に堀御家庭の彌光榮あらんこと念じ上候。

大ミオヤの量りなき光明のなかに、皆様ますく信念御すゝみなされて、彌光榮あられむことを祈り候。

大ミオヤのいしく暖かなる恵みの光榮は、常に照りわたりつゝあれば、御一家こゝろを一にして、めぐみのひかりに浴すれば常きはの春は其家庭にぞ現はれむ。凡そ世の中に眞の幸福は、如來の光明の照しわたれる家庭に於て享受することを得るなれ。願くは吾らが大ミオヤよ。吾同胞なる堀家の庭に、いや御光榮のあらしむるやうに

聖寵をたれ給へ。

四十五

此頃の御暑さの嚴敷につきても、

大ミオヤなる如來の御慈しみの深きを感じ申候。いかにとなれば、暑さが私どもの一年のいのちを養ふ稻を造り下さる爲と信する時は、あつさの強は御惠のつよきなりと、有難く感じられ候。法身の御惠みに成れる稻、米を與へ玉て、此身體の命を養ひ下さることは更に進んで、報身如來の光明をうけて、私共の永遠の生命なる心靈を、實しむる聖意ならずやとおもふとき、私共は一日の時間、も、空しく闇の中に暮すことはならで、光明名號を唱へて大悲の光明を浴て、ますます、心靈の發達せんことに、つとめまほしく存じて、あなたにも御すゝめ申すわけにて候。此度は九地に入りてあなたのやうな如來の御慈悲の光に充され麗しき信仰の同胞に大ミオヤの御聖意をわかつことになり

しは悦ばしき次第にて候。

思ひきや佐世保のさにかくばかり

恵みにみてるきみにあふとは

富田のきみよ。あなたに對してまことに、御勸め申したる事は、夜も晝もいづれの處にても、あなたの聖き信念の眞正面に、御慈悲の御おやは智慧と慈悲との光明を以て、永しへにあなたに向ひて在ますことを、常におもふたびに聖名を稱へて、歸命の想を爲して禮し玉へよ。

往昔、釋尊、涅槃の夜半の月も、また法然上人の月かげの道詠によみし月も此十五の夜に佐世保の富田家の軒端を照す月も私の旅の空に眺むる月も昔も今も西も東も一の月を眺むる如し。往昔釋尊が、靈山說法の會座に在ませし時に、阿彌陀如來の光明は釋尊の心想中に照輝き、また善導大師、法然上人の心念中に入り玉ひし如來も、今あなたが至誠心に光明名號を稱ふる時に、あみだ如來は、あなたの頭を照して心のうちに入り

玉ふ。私の心に應現し玉ふ彌陀尊も、宇宙間に最尊き唯一の如來が、往昔も今も此と彼とに交渉し玉ふことなれば、同一の如來にて在ますなれば、あなたはすべてに超えて、彌陀世尊を尊みて辱なく禮念し玉へよ。私は光明名號ナムアマミタ佛を稱へて、現に眞正面に如來在ますことを念じ上るとき、御影をもおもはで只靈體に對する様な時は只いと尊き尊崇の念に、自づから頭をたれて歸命頂禮の念が生じ候。また更に御慈悲の御面容を、心に念じあぐる時は欽慕の念に堪へず候。いつもあなたの念佛する眞正面に眞の如來は在ませり。如來と共に行住坐臥に離れざることを信じ玉へよ。私の心のうちに、自づとかがまして、いたゞきつゝある大ミオヤの、御慈悲の面影を寫して御送り申候間、常に御慈悲の尊容を浮べて御慈悲のミオヤを敬慕し玉へ。

四十六

西東身はへだつれどこゝろをば

おなじみおやのふところのなか

願れば月日のすぎゆくことのいと疾きこと、未だ東に歸りえぬ間に已に三年を経にけらし。實に世は無常遷流しばらくも止まることなしに過ぎゆきぬ。この無常を観するにつきて、彼の常住不變の大ミオヤの御許のなつかしきを感じられて、かたちはしばしかりのやどりなれども、こゝろは矢張り此まゝながら永遠常住の大ミオヤの大光明中に安住しある身にて候。肉眼に見ゆるはしやば世界、見るもの聞く物浮き世の物には候へども、心を静めて能く観じて見れば、こゝも大ミオヤの慈悲のふところのうちにて、おもへばおもふほど、ありがたく、かたじけなく感じられ候。たとへば赤き目鏡をかけて見れば外の萬物悉く赤く見ゆるごとく、自分の心が大ミオヤの御心に染りて、佛化して見るときは、天地萬物何一として、大ミオヤの御はからひにかゝらざるものなく、庭のうる木を見ても、矢張り淨土の七重の寶樹におもひやられ、いかなる處に於ても大ミオヤの光明に接せざる處なし。斯るありがたき光明中に在りな

がら、自分もたゞ娑婆執着の念の深きより、還つて自から苦しみと憂とを造りて苦し
 みと罪とを重ねつゝ、日々の日ぐらしをする人々のなげきは、全く大ミオヤをよそに
 して、たゞ自己のばかりに心を用ゆる故にて候。日々之作す業一として大ミ
 オヤの命ならざるはなしと、いさぎよく果さんのころよりなす業は、悉くみな此世の
 作業が、其まゝ佛道修行にて候。されば法華經にも心だに佛法と成り候へば治生産業
 も、みな實相と相應すとは此義にて候。日々行業、坐臥常に大ミオヤさまと相離れ
 すあれば、いかに安き心にて候。徳本行者が、

末なりの我らごときは食うてのんで

阿彌陀ほとけと寝たりおきたり

との道詠はありがたく感じ候。

尙種々申述度事候へども後のたよりに譲り候。かしく

時大暑のみぎり、皆様いかゞ在らせられ候哉と存候處、御郵書によりて承はれば御小兒さまははかなくならせられしとの御事、傷ましきかぎり哀悼に堪へず候。みどり子、何の罪なき、ほとけさまのやうなこゝろのものを、いかなれば、無常の殺鬼といふ残酷なる奴は、憐れみもなく命を奪ひ去りしぞとおもへば、實に無常の殺鬼は憎むべき族にて候。眞に御小兒の御事は傷はしく存候。傷はしさの深きほどまた御小兒のゆく先を案じられ候。また皆様の御悲しみのほどをも深く察しられ、いかにも同情に堪へず候。それについては傷はしき御小兒の爲に、ますます大ミオヤの慈悲の光を仰がざればならぬことと存候。大ミオヤの光明の外に闇よりやみに入る御小兒のゆくゑを照し給ふものはなきものと存候。皆様の御悲しみの深きほどは、大ミオヤの深き御なさを頼まざればならぬことと存候。眞實に悲しいから眞實に大おやささを頼みまいらすやうになし候へ。

をとなの事なれば自業自得と云ふ事も有之候へども、御小兒の事なれば、皆様が成り

かはつて一心に念佛し回向候へば

大ミオヤの大悲何ぞ容れ玉はぬべきぞ。

皆様が御小兒のみちびきにより、ますく大慈大悲の親様をたのみ、稱名いよく忘れがたく相成り、親様との御親しみが深く相成候ことに至らば、全く御小兒は佛の御使として、みな様にうき世のあだなるをさとり、淨土の欣ぶべきことを、知らせんが爲の善知識にて候。

子を失ひしことの歎きによりて大ミオヤが若しも私どもが親さまの御許をはなれて聞から聞に入る、ことを歎き給ふことをおもひ上らるべく候。むかし泉式部ほどの婦人にては始めには佛法を聞くも唯歌をよむ材料位におもふて居りしのが一人の娘小式部の内侍に先だれし爲に何とも悲しみに耐へず、もろともに苦の下には朽ちずしてひとり憂目を見るぞ悲しき」と歎きしが、先きだたれし小式部の爲に、眞實に佛法を求めてついには眞に大ミオヤの慈悲をも深く感じられ、寢てもさめても光明住居の身と成

りしのちに、「夢の世にあだにはかなき身をしれと教へて歸る子は知識なり」とよまれしとの事。願くばみな様も、御小兒のみちびきにて、眞實に大ミオヤを頼み、深くじひの光明を得るときは、此世を通じて永劫にたすかることに成るとおもへば、實に御小兒こそは善知識にて候。たとひ佛が金色の光明を放ちて、説法し給ふことを聞くよりは、佛の御使たる小兒のみちびきこそは、深く感じらるゝとむかしより傳へられ候。殊に、御小兒の御兩親におかれては、まことに、先だちなされし御身のために、ますます大ミオヤのみ光によりて、救はるゝやうに御信仰なさるゝことを御勧め申候。光明歎徳文に、大ミオヤの光明の廣大無邊の徳を釋尊がしめし給へり。されば光明歎徳文を朝な夕なによみなされて、而して稱名をばとなへ、一すぢに大ミオヤの御慈悲のふかきと光明の徳とを念じてなき御小兒の爲に手向なされ御兩かたのこゝろに感じらるゝほどに、御小兒のたましひには、光明のまことを得らるゝことにて候。能々さとのみちが明らかに相成候へば、全く御小兒はみほとけの御使として、あなたがたを

みちびくために、あなたがたの子となりて出でしとおもへば、是非とも此御みちびきに本づきて、大おやさまのまことを得る信仰をおこしなさるゝやうに、かへすゝも御すゝめ申候。身を犠牲になして、御両親をみちびきなさる御小兒こそは、まことに善知識にて候。もしも此御縁を空しくすごしなば、もしや御慈悲の御手にとりつく御縁はなきことにて候。

かへすゝも、大ミオヤのふかき思召のほどを、むなしくなさらぬやうにねがはしく候。まづは御小兒の御手向かたゝ

大ミオヤのみむねを傳へたさまでに斯のごとくに候。

四十八

惟みるに、人の此世に生を受けたる、いかに榮耀榮華に日を暮すとも、しばらくの夢のあいだにして、朝に開きし花の、夕に散り果つる運命は、免かれ難き事にて候。され

ば佛教を初めて開き給ひし釋迦如來は、中天竺に於て淨飯大王の太子として、此上もなき位につくべき御身にして、双なき榮耀を受け給ふべき生を受け給へども、それでも自から謂ひ給ふのに、また四門の遊びに老病死のさまをば御覽なされて、實に世は無常なものである。いかに尊き王位を得ても無常は免れない。さればあだし世の果敢なき榮華を打ち捨て、疾く眞理をさとりて、我も人も同じく無量永恒に常住の樂しみを受くべき道を發見せんが爲に、つゝに國も位も棄て給ひて、山に入りて有ゆる艱難困苦をなめなされて、六年の修行の十二月八日の曉に、無明生死の闇を晴らし、またなき正覺を得なされた。初めて魂の夜が明けて、眞の極樂の光明世界が發見なされた。それより從來の事をふりかへりて見れば、本に夢のなかにゆめを見て居つたやうなものでありし。

其時に初めてさとり眼を開きなされて、あみだ如來の光明あまねく十方世界を照らして佛を念ずる人々を光明の中におさめて守り給ひ、其人の命終れば光明永しへに

かゞやく樂しき御國に、生れゆくことを諦かに御さとりなされ給ふた。其宇宙に唯一りの尊きあみだ如來とは、實には一切の人々の靈の眞のみおやであるといふことをさとりなされた。島田かつ子のきみよ。あなたはいかゞおもひなされ候や。此天地萬物も皆悉くひとりの大御親の如來さまの御恵みと御力とによりて、斯はなされ玉ふたので、而して何の爲にかくは人間として此世に出しのであるかと、大ミオヤの聖旨を能く御考へなされ給へ。夫ともかつ子のきみよ。どなたでも何の爲に此世に生れたのであるかは、深きわけはわからぬのであります。さればこそ釋迦如來として此世に御出ましなされて、あみだ如來といふ大ミオヤの在ますといふことを教へて、大ミオヤの御もとに歸ることの得らるゝ資格を取る爲に、人は此世に出していただいたのであると、示しなされたのであります。實に此度こそは無量永劫につきぬいのちの大ミオヤの御國に歸ることのできるやうに心を懸け候へよ。しからばいかにして、其資格が得られませうとなれば、光明歎德章に教へ給ふてあるやうに、大ミオヤの如來の光明

の御徳を聞きて、一心に名號を稱へて至心不斷なれば、現在には光明の中に歡喜の日ぐらしをして、而して此世の終りには大ミオヤの御膝下にかへるのであります。

島田かつ子のきみよ。いつでも、大ミオヤの大きな廣い、慈悲の懷の中に、在るといふことをおもひ給へ。而して病氣のことを思ひ出したならば、直になむあみだ佛くと稱へて、おやさま守り給へと祈りなされよ。ひかし永觀律師と云ふ高僧は、天子さまの御戒師に成りなされた御方であつたけれども、平生御病身であつた。それにつきて自から言ひなされた。病は善知識である。全く自分の信仰の強く發つたのは病氣の爲であつた。爲に無量永劫助かる心の發りしも、病氣の故とおもへば、病氣も恩寵である。と云はれしとぞ覺ゆれ。本とうに御すゝめ申します。一りの大ミオヤをいたぐ、きよき同胞のかつ子のきみよ。つねにおやさまくとしたはしきことを以て、大ミオヤをよびてしたしくたのみまゐらせて候へ。

尙くさく申のべたく存候へども、のちの便りに譲り申候かしこ。

四十九

信仰の事にて暫らく申進め候。宗教は自己の中心真髓なる自我の靈性が、客體なる大宇宙の中心本尊たる靈格に、歸命信順して親密なる關係を成す處に成立ものにて候。我らが此肉體を活す處の本は、宇宙萬物の中に於て、太陽を中心として萬物の設備を以て我らを活し給ふ。

無量光如來は精神界の太陽なり。若し太陽のエネルギーなかりせば、我らが此肉體は活きること能はざる如く無量光如來の靈光によらざれば我らが心靈は活きるものにあらず。太陽の光にて物質的に活けるは、常に人類のみにあらず。すべての動物も植物も、悉く之に依て活るなり。若し我ら唯此物質のみ活きるならば動物生活にて候。

されば古往今來すべて宗教界の偉人なるものは、悉く如來無量光の光明によりて、靈的に活けるものなり。然らばいかにして、靈界の太陽なる無量光如來の光明に攝めら

れん。例へば鶏卵の孵化する如くに我らが、一心に眞ごゝろに念佛せば、必ず心靈の卵は靈化して、活ける信仰と成るに至らん。

夫には至誠熱心を要する事にて候。

またつねに太陽を仰ぎつゝ太陽を通じて是我らが、如來の顯現なりと念する時は、太陽を通じて如來を信することを得ん。南無阿彌陀佛を唱ふるは絶對人格の御名なれば御名を稱ふれば、自づと人格的の尊體を念するにいたる。絶對人格常に我らが信念の前に在ませば、我らは之に對して、尊崇の念、信頼の心、發らざるを得ぬ。是聖名を稱へて人格的如來に接するの道にて候。

されば聖名を通じて靈格に接し玉へよ。

まづは取りいそぎ要のみを申述候。

善導大師禮讃無常偈に、

人間は忽々として衆の務を營みて、年と命の日夜に過ぎ去ることを覺らず。燈火の風の中に今にも消えなんこと期し難きが如し。忙々として眞闇にて六道のうち何れの處に越くべきをも知らず。未だたしかに苦海をのがれ出づるの道をも得ざるに、いかなれば安然として驚懼せざるものぞ。各々聞け強健に有力の時、自ら策ち自ら勵みて永遠常住の michi を求めよと。

實に我も人も、皆悉く忙はしくと來る日もくも世の營の爲に一日々々に我命の促りゆくをおもはで、風前の燈火なる我身をかへりみず、ゆく先をみれば眞闇にて、六道のうち、何れに落ゆくべきゆくゑだにまだ定まらず。古人の「何事も皆いつはりの世の中に死ぬるばかりはまことなりけり」と詠まれし如く、世の事はそれからそれへと衆々豫期したることもあてにはならぬ。只死ぬ事ばかりは、早晚逸れがたき運命を持つてゐるから、さまでに驚かさるるは實に不覺なる事ぞとの大師の御警告のほど。さればこ

そみはとけの教をくへに基もとづきて、永遠安住えいゑんじやうちうの如來にょらいのみちを求もとむることにこそあれ。

さて其後そのごは絶たえて御無音ごぶおんのみに過すこし、何なにとも慚謝さんしゃの至いたりに候まう〇定さだめて宿世しゆくせよりの御因ごいん縁ねんでは有あるなれども、御子息ごしそくの先まきだちなされし事ことには何なんとも哀悼あいだうに不耐候たへずらふらよげ實じにおもへば定さだめなき世よの習なひ、それにつきても彼かの泉式部いづみしきぶが一人ひとりの女小式部むすめこしきぶ内侍ないしに先まきだゝれ、それを發心はつしんの動機どうきとしてつゐに念佛三昧ねんぶつさんまいの身みとなりて、

夢ゆめの世よに仇あだにはかなき身みを知しれど

教をくへて歸かへる子こはちしきなり

と。泉式部いづみしきぶはむかしは才さいにはこり能のうにたのみ、我われほどえらい女をんなはないとまでに、自みづからもほこり、他たもゆるしてをりしならん。また佛書ぶつしよなどもまま學まなびて知しり得えたらんなれども、そは只歌ただうたをよむに、佛教ぶつきやうをしらざれば釋教しやくきやうの歌うたはよめじなどと、只歌ただうたの材料位ざいりゆうくらゐに學まなびたる佛教ぶつきやうにては、一大事だいじの場合はあひには何なんの効能かうのうもなく、されば愛子あいし小式部こしきぶに死しにわかれし頃ころほひの哀悼あいだうに耐たへずして、

諸ともに苦の下には朽ちずして

ひとり憂目を見るぞかなしき

とよみにけるも實にことはりにこそ。

のちに性空上人の教化に依り、念佛三昧の門に入りて如來慈悲の光明に觸れて、漸々に深く彌陀本願の意をよみとり、何とも得も云はれぬ、ありがたさの身に成りければ、若し我いかに佛教を學びしとても只道理こそ辨まへても眞にたましひにしみぐ深く御慈悲の親さまの彌陀如來に眞實親子の親しみ合ひが出来て寢てもさめても彌陀の懷ずまると成る迄のまことの信仰を得たるは全く娘の小式部が先だちて我をみちびきてくれし爲に、我も斯までに御慈悲の大ミオヤをしたふ心に成りしなれ。たとひ釋迦如來が光明赫やくと照して、金口の說法まのあたり聞奉らうとも、眞實に骨身にしてみて信仰心の起ることは、娘の眼前に示して呉れた說法でなくては、私ごととき、なましかしき女子には、魂にしみたる信仰は出まじきものと云はれしもことはりにこそ願

くは宮川家の御兩親さんよ御子息の身を犠牲にして皆様を永遠にまで救のみちを求めなされよとの御勸告をむなしくならぬやうに望ましく候

宇宙に獨りの大おや様をばたよりなされとの御すゝめをみなさんの御こゝろにわかりて成るほど彼ことは我等をみちびく知識なり、我らが子をおもふ如くに大ミオヤの如來は我ら子を憐み給ふとの如來の親心をさとらせんが爲にしらして呉しものよと、しみ／＼と大悲の親さまにすがるときに先だちし御子息はあなたがたの胸の蓮華と共に淨土にて蓮の華開きてさとの身と成ことにて候。まことに延引ながら御すゝめまでに申進候

五十一

其のち云何被爲候哉すべて世の中の事はおもふ事業ははか／＼しくゆかざるに月日は時計の針の斷間なく過ぎゆき候

心意が地獄に向つて進むひととも餓鬼の業を積む族もまた光明中に清き御國に向上的にすゝむ人もかたちは同じく逝く水のそれと等しく流れて止まぬ光陰をくらし申候せめては地上の天國とも云へき淨土の光景を此土の教會にて實現すべき日の運り來る日を大ミオヤに祈りつゝ力を盡し候

博多の市内に青年士女相つどひて朗らかにミオヤの聖徳を讚美する聲やまた聖典の講説を聞きて歡喜極なきを覺ゆる士女らのさまを見ることの得らるゝ日の格らんことをねがはしく候

五十二

孔夫子は天の命之を性と曰ひ性にしたがふ之を道といふ。此道なるものは須臾も離るべきものではない離るべきは道でないと示された。また天は言はずして四時行はれ萬物成るとはこれ天の道である。天に則りて行ふは人の道である。聖人は天に則り

て人の道を教へ玉ふたのである。

宇宙に本然の大道がある。此を阿耨多羅三藐三菩提と名づく。即ち無上の大道と云ふことである。此無上の大道に則りて至善の極に通達する道を釋迦老仙が發見して之を佛道といふたのである。道といふは外でない。人の精神は眞善美の極致に向つて進趣する行程のことである。教育と云ひ教化と云ひ人を智に徳に藝に於て眞善美に向上するを目的とするに外ならず。然れども宋儒が云ふごとくに、人心是危ふく道心是微にして、人慾の私はますく危く眞理に向ふ道心はいよく微にして、ついに可惜人生を闇黒の裡に葬られたりてふもの比々みなしかりである。こゝに於て吾が心のかなふ君たちと共に大に顧みる處あつて一のあつまりを催して、至微至妙なる道をたどりて共に手を携へて眞善美の方に向ふて進むべきを目的として會をもうけ道の友と名づけ月に一たびは會して共に研磨し修養し智に徳に向上せんことを期するのである。

就て吾か敬する處の道の友よ時には大に論戰することもあるならむ。しかれども君

子の争たれ。小人の争に倣ふなかれ。君子の争は理性に出て理性に解決す。そは還つて向上の機とならむ。小人の争ひは理を外にして感情に訴へ動もすれば胸に動悸を發し顔を敍にして罵詈するに至る。斯のごときは君子の慚づべき處である。ア、敬すべき吾道の友よ、俱に進まむ眞に善に、共にすゝまむ極みなき道に。

五十三

吾聖きによる友なる湯地夫人照子きみよ。この人生は數十年間の航海中にてあればまことに日和よき日に甲板の上に共に談笑し遊戯し運動し舞踊し歡樂のなかに船の上なるを打ち忘れて過る日もあれば、忽ちにうつてかはりて天候が變じて今日は黒風を起し物すさまじき風の音怒波は正に艦を顛覆せずば止まずと云ふ如きに至りては今にも我身を魚腹に葬らねばならぬばかりになりぬれば、昨日の談笑歌舞の聲は變じて悲鳴號泣の音となる如き實に六七十年間の航路はいかに快樂なるか苦惱なるか慘憺たる

か。こゝに於て人生は快樂なりと謂へる樂天觀あり、また苦惱なりと觀する厭世主義あり。而して人生は樂天といふてきまりしことでもなく、また厭世と云ふ定まりもなかるべし。同じ一人にしても時によりては樂天となりまた厭世となる。世界のために自己を約束せられるものはつまり世のためになやまされてしまふ。

人生の航路に大なるたすけとなるものは人間以上の偉大なるものゝ力によるの外なし。その偉大なる力なるものは吾が佛教に謂ゆる眞の神宇宙唯一の尊きもの

阿彌陀如來にまします。阿みだ如來は宇宙のいのちなり。世の光明なり。この光明によりて自己の精神を靈化するにあらざれば、人生の眞の幸福は得らるゝはづなかるべし。人の苦と感ずるも樂と觀するも歸する處は其人々の精神にあり。他人より觀れば彼はいかに苦しからんとおもふも其人は内心平和に満足に日をくらすものあり。また他人が見なす處は彼はいかに幸福ならんとおもふも其自身には自己の心より惱みになやみの子を産み憂に憂の友をあつめて我が胸は安からず日をおくる人あり。而して

かに惱み多き人もまた心安からぬ人も自心を力としてはとても平和に入ることは能はぬ故にそこで偉大なる力を有する

阿彌陀如來に歸して而して如來の光明によりて自己の精神が靈化せられ、こゝに至りて初めて眞の平和眞の歡喜は得らるべし。

自己の心にして靈化する時は外界よりいかなる境遇に臨んでも逆境に立ちてもたとひ心のなやみあるやうにしても、心の奥の方にかゝやきつゝあるみ光りは大に慰藉の感ずるあり。惱の奥にも樂あり憂の底にも安き光の感ずるあり。

されば求めよ聖き光を。發得せよ聖き光を。

しかれば如來の聖き光に靈化せられたる心のさまはいかに成るやとならば、人の心の感覺と感情と智力と意志とに心の分類をなす。

人の心の感覺には眼耳鼻舌身にて視と聽と嗅と味と觸との作用これが凡夫は視れば眼をけがし聽けば爲に耳から心をよごす。然るに如來の聖き光に靈化せらるゝときは

まことに清きに化する故に清淨光と名づく。されば清淨光に感じたるこゝろを

清らけき名に心のはれし夜は

月のひかりもいやまさりけり

きよらけき光りのかげとみなすかな

さやかに照らす秋の夜のつき

濁りにもそまぬ蓮の花のいろ

清められにしこゝろともがな

雲はれてさやかに照らす月かげを

清き光にたぐひてや見む

人の感情てふものは苦惱憂愁連綿として跡をたゝす。然るに聖き光に融化する時は

内心平和と歡喜とに充たさる。

あめつちにみつよろこびのみひかりの

照^てりわたりてや春^{はる}ののどけき

よろこびのひかりをしればとことほに

のどけき春^{はる}のこゝちこそすれ

よろこびの光^{ひかり}をよそにくらす身^みは

さぞうかりける世^よをや經^へぬらむ

憂^{うれ}と云^いふうき世^よのやみもはれぬべし

このみひかりの照^てす前^{まへ}には

人^{ひと}の智^ち力^{りき}は本^{もと}より神^{かみ}の眞^{しん}理^りをしるべきものにあらず。さればこそ迷^{まよ}をなし愚^ぐ痴^ちをお

こす。若^もし如^{にょ}來^{らい}の聖^{きよ}き光^{ひかり}によりて心^{こころ}の眼^{まなこ}開^{ひら}く時^{とき}は如^{にょ}來^{らい}の境^{きやう}界^{がい}をさとりうることを得^うべ

し。

ひきしめてむすぶ戸^とばそのひまよりも

しづかに照^てす秋^{あき}の夜^よの月^{づき}

御名をよぶ聲にこゝろの雲はれて

さやかに見ゆる月のおもかげ

静けくもすみたゝへたる水のおもに

月は夜な／＼かよひくるなり

人の意志てふものはもと俗情卑劣なるものにして名利のためにほだされ、たとひ善をなすも偽善多し。若し聖き光に靈化せらるゝときは高等なる真心の道德眞の善心とはなるらめ。不斷光はこの光なり。

たゆみなくすゝみ／＼てまたもなき

聖きみくにゝやがてつかなむ

日にあらた日々にあたらにあらためん

斷へぬ光に照らさるゝ身は

斷へなくばわだつみさへもくみつくす

なにごとかそもならぬものかは

内うちと外そとのさはなすものとたゝかはむ

聖きよき光ひかりをちからとはして

如來にょらいのきよきみ光ひかりりによりて聖きよめられし心こころのすがたの一端たんをよみたりし。然しかれども如來にょらいの光明くわうみやうは無む限げんにましませども、このみひかりを受うける器うつはのつたなければ恰あながも世界せかいを照てす太陽たいやうのひかりは無む限げんなれどもうくる身みはちひさき如ごとし、まして眞しんの光明くわうみやうに於おてをや。

吾わがきよき友とも、夫人ふじんよ、願ねがはばこのみひかりのなかにあらんことを、われは如來にょらいにいのりたてまつる。

五十四

拜復はいふく今日こんにち御息女おきよめ信子のぶこきみの御計音ごけいおんに接せつしてたゞ歎なげきとともに　ミオヤなる如來にょらいの聖きよ

きみ名をとなへて信子きみのみたまをすくひてきよきみくに、おさめたまへと祈りた
てまつる外なかりき。

御令母なる照子きみよ。御愁傷のほど實に察し上げられます。げに御なげきは御尤
に存じますなれども、あなたの御かなしみよりもなほ大なる大事なことがあります。
御なげきの爲に此一大事を御わすれに成りましたならば、信子きみこそ實に御不便に
存じます。その一大事とは外ではありませぬ。先きだちたまひし信子きみの心霊のゆ
くべき所であります。からだはやけば灰うづむれば土と成るので、心霊宿つてあれば
こそ御息女であります。その心霊脱て已ば、かたちは本のしづくであります。此活き
て死することなき心霊を救霊するまことをさとて諦に教へ下されしは、しやか如來
の御示しになりし佛教であります。心霊の脱たる骸を葬るのは神道でも何でも出来ま
す。なれども正しく心霊を救ふ道をたしかに御説きになりしは佛教であります。

信子きみのためにはいかなる聖者のいのりよりも血肉の縁もつとも深き御母なるあ

なたがまことをもつていのるのが第一であります。いかゞに祈るとなれば、心霊のミオヤなる天地萬物の源なるアミタ如來を御たのみ申上ぐるのであります。大ミオヤの御名をアミタ佛と稱すれば、ナムアミタ佛、ミオヤなる如來よ信子の靈を救ひ玉へと祈り申上るのであります。

一心にナムアミタ佛と祈る時は心霊のミオヤは能く知ろしめして必ず御救ひ玉ふのであります。

アミタとは天竺の詞にてこちらの言ではど、かぎりなき光とかぎりなきいのちなるかみ、即ち天地萬物の父よ、われを救靈たまへと云ふことをナムアミタ佛と申すのであります。

心霊の事につきては心霊のミオヤをたのむ外に道ありませぬ。一心に御たのみ申上ぐる時はミオヤなる如來は必ずすくひたまひて、アミタ經に説きし極樂に生れて觀音さまと同體の光かゞやく身となりて、いのちもつきることなき樂みも極りなき身とな

られます。而してやがてあなたも同じ眞如の都なる極樂にゆきて、もはや再びわかれることなき身とられます。極樂に生るれば今のすがたとはかはりて光かどやく身と成り神通力がそなはるから今日のこととは能くたがひにわかると申します。

アミタ經をよみ一心に念佛して信子きみの御ぼだいをいのり玉へ。これまことにく^く以て御すゝめ申上げます。若しあなたの御なげきばかりで一大事なる信子きみの心霊のために念佛いたしませねば、信子きみのためにはさはりになりても決してた^{けつ}かる因縁にはなりません。

五十五

觀世音聖影

故信子きみの冥福にすゝむ。

先きだちたまひし信子きみのために御母をはじめ御祖母さまも共に一心に念佛して冥

福をいるときは

如來の御すくひによりて清き國樂しき國にありてこの觀世音と同じき聖なる體となりて無上のさとりを證しますなり。

ために拜寫して贈呈す。

五十六

太陽の光は肉眼に見ゆる所を照し アミタ如來の光明は精神を照し玉ふ。一心に心をしづめてナムアミタ佛と稱へて如來の光明の中であると心に思ふてこの御光明にて信子君もくらき所よりすくはるゝと意に思ひて一心に念佛するのであります。若しあなた達の愚痴をいたしなげかなしみばかりで心がやみになりますれば信子君もやはりよみちのやみにさまよふのであります。

まことにあかるき所へたすかるやうにいたしたくば眞理の光なる

ナムアミタ佛の光明を念する外に光はありません。

全くあなたが信子君を御たすけ申たくば一心に念佛申しなされ玉へ。

たとへば旅順の役に乃木大將が可愛御子息を失ひたる悲みより國を守る大事の方を重くとりしと同じく、死別のかなしみよりは心霊をすくふことの一大事の方が重いのであります。

かなしみのために心霊をたすけあぐる一大事をおもはぬは癡愛と申します。

かへすくも心霊のたすかるよふに如くなる

ミオヤを祈り上ることをわすれたまひそ。

五十七

心なき身にもあはれはしられけり死木立澤の秋の夕暮と歌の聖西行のよみ玉ひし如く、千古かはらぬ自然の法則山野にみつる樹々のいろ、草むらにすだく虫の音今年

の秋の名残惜しきやに感じらるゝかとおもはれて候。

良に惟れば天の大ミオやさまのみはからひは此世に生ひ立ちし數かぎりなき子どもたちの爲に何か爲さぬでは在られぬやふに、春は蒔かざれば生へず、夏は耘らざれば成らず、秋は刈り收むべきやうに仕事を御さづけ下され、而して冬の寒さに春の暖和なる氣候をまたせるやふに暑き夏の日に涼しき秋を招かせるやふにし、春の彌生はさくらの花に浮くを秋の夕暮に無限の哀れを感ぜしめ、此世に在るほどは日々に食ふては寝ね寝ては起き、くり返し同じ事はかりを爲しつゝあるが中に、月に日にがはり來る年を迎へ送りいつもく一つ事はかりで倦あきてしまはぬやうに春よ秋よ花よ鳥よ月よ雪よとまはる舞臺の裝置のほど、天を見ても地をながめても實に至らぬ隅なき大おやさまの御はたらきと御恵みとは、いかにがんせなき世の子供たちにしても、考へて觀たなら感謝の念は湧き出づるならむと存じ候。

さて此に就ても忘れまじきは人事ならぬ我身の一大事。早晩消え果つべきに定りあ

此身の爲には少の出来事でもなく、捨て置がたしと云ひながら、永遠に捨てること
なき我心靈の爲に、永恒の光のなかに常住の幸福を求むる道の爲には、よき事にして極
樂の樂しき國にゆく道に心の足はこびやらで、たゞ日々夜々に三毒煩惱に心を焼か
れ五塵六欲に神をけがし如來より修行の爲に與へられたる光明の時間をたどうか
と闇の中に暮してしまふとは、いかにがんせなき子供とは申ものゝ、まことに心なき我
らかなと自ら己を責て、このまゝ再びあはれぬけふの日を空しく過してはと存じ候ま
ゝ、我同胞と仰ぎ候方の爲に、此貴重の光陰をミオヤさまの思召のほかに浪費し已り
ぬればいかに残念と存じ候まゝ、念の爲ながら申進候。夜もすがら鳴き通す虫さ
へあるに、我らは永遠に救はるゝ處の稱名を稱ふるにもものうきとはいかに愚者よと
己を尅めて候。

また宗祖大師のあみだ佛に染むる心の色にいでば秋の稍のたくひならましの御詠の
こゝろを思上げて、秋の草木はうすいろづくに麗しく染らぬ我心のほどを思ふてか

こちらける。

尙申上度き事多く候へども後の御便りまでに遣し置候。

五十八

時しも寒威嚴敷折其後打ち絶へて御無音のみに過し候。昨冬十一月下旬より濃州に出張し僻地に在りて傳道に従事し岐阜市に出で宣教し已て當寺に來り候。まだ利子どのにも面會はせざれても當住に由りて傳へ承はれば、御主人様御病氣腦病發り玉ひしとの御事大に驚愕候。兼々承る處によれば本御肥滿には在らせられしも灸點師の見立上腦病の發りなざる憂なしとの事に聞き待りしにいかにしてかと大に案じ上げ候。定めて御看護萬端の事なく容易ならぬ御事と察し上候。

實に案ずれば世の有様は經にも宣ひし無明闇夜の旅の世、日々過ぎゆく月日のなかに一寸先闇の世、今日我無事なるも明日此身に如何なる事の出來るやを知らず一時間

の後をも自から識らずして闇の道中。そは上下の差別なくすべて凡夫の習是非もなし。いかに政治上には明るき目あるも我身の上にも一寸先を見る事出来ぬは矢張り凡夫の常伊藤公爵の如きも争でか此仲間を出ることを得ん。

いか成健康も恃とするに足らず、いか成榮華も何ぞ頼むべきものぞ、今日ありて明日を期すること能はざるは此世の習、實に頼まれぬ世なるかな。さればとて決して世をはかなみて世を厭へよとの言にあらす。斯る世の習なればこそ

眞實に頼みてもまた頼むべき處の常住不變の眞理の道に立脚地をかまへて而してこの轉變極りなき世の業をなすべきにぞ。即ち常住不變永恒かはりなき處の如來の天心光中に安心を構へて日々の所作をなすこと。

されば文豪ゲーテ曰く、人は今日死すとも遺憾なからんやうに日々つとめよと。人々其身其身に過去より乃至此世に生ると直ちに自ら持ち來りし運命は自ら有しなから、少しも後が見えねばこそ事に觸れて驚くなれ。若しも平生に大安心が出来し事な

ればさまでは驚くまじきにぞ。

むかし鎌倉扇ヶ谷に住める上杉の家臣太田道灌が大事業を企てますく自己の理想が實現せんとする中ばに不意に頭を切られんとするに望み、道灌の頭を切らんとする士が白刃をかざして、

「かゝるときさこそいのちの惜しからめ」

とよみしかば道灌少しもさはがす取り敢ず

「かねてなき身と思ひおかすば」

と下の句をよみしとかや。道灌の如き大希望をいだきながら殺さるゝはいかに壽が惜しいだらうと云ひしに、道灌は本より入道即ち佛門に入りて法名までつけて佛の道を修行して居れば、曾つて此身と云ふものは切られて初めて無いのではない、本來無きものと悟りて居るが故に、何も今更あらためて惜しいとは思はないと云ひしなり。尙進んで云はしめば、我は此身は本より無しと云ふことを悟ればこそ佛に入りて切つても切

れぬ殺しても死なぬ不死の成佛を修行したのである。汝士よ、此本無の身はきれやうとも吾が心靈は汝きること能はじとの意ならん。

いづれにしても此世に處しては此世の眞理をさととりて世に處すれば愚痴が出ぬだけ眞理にかなふことに候。此娑婆に生を受けて娑婆の掟を意得ぬかたは本々定まりてあることを明にせず、娑婆已外の事にでも遇ふたやうにおもふことに候。されば釋迦如来も老病死を見て世の非常を悟りつひに王位を捨て入山學道してつひに不老不死の眞理を教へ玉ふ。

あみだ佛即ち無量壽の眞理なり。あみだ佛を信念して如来に攝取せらるゝ時は常住不變なり。

しかあれば常住なる如来の大光明中にありて、しやばのきそくをさととり、しやばのきそくに随つてしやばの事をいたさば何ぞまた驚くべけん。いさましく日々の事をいたすべきこそ光明中にありてよくしやばの掟をまもりし人とはいふならめ。

此世このよの有るべきことをよくさととりて理ことに明あきらかなる人ひとをしやばのきそくに明あるき人ひととは云いふならめ。

願ねがくば光明中くわうみやうちうにありてよくしやばのきそくを御守おまもり下くだされて御看護ごかんごし玉たまはんことを乞こふ。

尙申上度事なほまをしあげたきことおほ多く候さよらへども後便ごびんにゆづり候さよらふ。

五十九

習志野ならしのの草くさしげき草くさの庵いほりにて禿筆とくしつをはせて山やまと海うみとの美びにとめる鎌倉かまくらのさといませる湯地照子ゆぢてしこきみまでに啓まをす。

爛漫らんまんとかじやくばかりに美うつくしきいろをなす櫻さくらも馥郁ふいくとして芳かんはしさをはなてるすみれもみな吾わが

大ミオヤの御めぐみのあらはれと存ぞんじ上あがるときは野のに由よに咲さきにほふ花はなのいろ香かを見み

るだにおろそかには思はれませぬ。たゞくみづからを恐れ大きなに御めぐみに對して感謝の外はありませぬ。

ミオヤは咲きそめる七重八重のさくら花の色にも芳ばしきすみれの香にも我々がためにいとおごそかなる訓誡をたれ玉ふていませう。

一には、ミオヤの御いつくしみはこゝろなき草木の上にまでいろに香に光榮をあらはし玉ひて、

汝よ、そなたのこゝろの聖なる花をかく開かせよかしとの御さとしならめと存じます。

二には有爲轉變の世の習ひかくはうるはしきいろ香もしばしのほど夜半のあらしにさそはれて名残おしくも香をだにとめず、いろは匂へど散りぬるを我世たれぞ常ならむと、我身のあだなることをさとれよかしとの御警告は、おもへばく御じひのふかさを感じられます。

天にも地にも充滿せる　ミオヤのいとあたゝかなる春風和氣のなかにつゝまれつゝある我身いかにして靈の花は開かぬぞかし。

聖空海上人が

空海がこゝろのうちにさく花は

ミタよりほかにしるひとぞなし

我らミオヤの聖き風靈なる和氣にて聖なる心の華咲かば、常盤かきはに香は匂ひ、いつものどけき春の日のみ、聖なる心の花は、かんばしさはかんばしく、うるはしさはうるはしく、湯地照子きみよ、聖きところの花の香を、風のたよりにふきをくれよかし、そのかうばしき香をきかまほし。

六十

此頃の御熱さは凌ぎがたく候しかれどもこのあつさによりてこそ我日の本の國の人

草のいのちねなる稻をも實のらしむる

大ミオヤの御惠なりと信ずるときは還つて感謝を以てむかふやうに感ぜられ候。此御あつさの折から、御主人様には昨今いかゞわたらせられ玉哉御伺ひ申上候。愚祈事西に東に傳道のため馳けめぐり居候。五月 中旬信州にて傳道續きて當國にて傳道を試み候。

さてつく／＼觀すれば、世の中は夢かうつゝか、うつゝとも夢とも見へず有りてなければ、と昔巴の前が詠じたる如くげにうつりゆく世の中よ。また此頃は日の本を錦にをりなせし朝日に匂ふ春の日はいつか暮れはてゝ、もはや今年も夏過ぎて秋風をむかふ今日とはなりにけらし。おもひめぐらせば去年の此月の中頃御館に御訪問申上候て久しふりにて親しき御談しをいたせしことも、いまは一とせむかしのことゝはなりぬ。

世の中を何にたとへむ朝ばらけ漕ぎ行く船の何とやら古人が口吟まれし。喜も悲も

みな夢、苦みも樂みも悉くまぼろしのほど。實に人生は造化翁が仕組せし一場の演劇なりとは。しかるに世の人はおしなべて他人の悲劇は好んで見まくほしきやうにありながら自ら人界の舞臺に昇る活劇には悲劇の主人公と成ることを欲せざるは何故ぞ。人は生涯に於て自ら悲劇をも演じ喜劇の俳優とも成りて娑婆の役を経験するにあらざれば人情の秘奥は悟られぬものとは聞き侍りて候。老若男女、貧富貴賤のへだてなく此人界に生を受けたる者は悉く天の大ミオヤより其身分に應じて役割を命せられし役者として見れば、何人も自己の役を忠實に一心に力を竭してつとむる時は、必ず其報酬は世の終の日に於て大ミオヤより與へらるべし。

殊に大なる慈悲のミオヤは可愛き子らの爲に、何時もいつも影の形に隨ふごとくに、この身を離れずして守り玉ふて、つよき力を與へ玉ふことを信知する時は、いかなる役割も悦びいさぎよくつとむることが能ふべし。而していよく天分を果したる晩には月桂冠をいたゞきて光明永しへに輝きつゝある常盤かきはにはほふきよきみく

にの

大ミオヤの御もとにいたりてもろくの大聖人衆とにもまたなきさとりの実を結ぶことを得るはまさしくいまこゝに在して光明名號によりて信念の花開くより結ぶ果とぞ申し候なり。

娑婆八苦の風はいかに劇しくとも大ミオヤの慈悲の懷には通せず、いかに惡魔はさまたげんとすればとて如來大光明の中には妨ぐることはす。

湯地令夫人よ、願くば常に神を如來大慈悲のみふところに安んじ大光明の中に住し玉はんことを。

六十一

此ごろ口すさみたる道詠を書き列ねて進じ候。まことに言葉は拙く候へどもたゞ

く

大ミオヤの御恩寵を感謝しつるありのまゝをものしたるものなれば御詠吟なされて御
 恩寵の味を御わかし申上候ことに相成り候はば幸のことにもと存じ候し

ゆくもまたかへるも今はなかりけり

あみだほとけのなかにすむ身は

ゆく末も今も此まゝなむあみだ

ほとけとゝもにとはのいのちは

あらたのし無爲泥洹のみやこには

のどけさ有無をはなれてしかば

法の身のちからしなくばいかにして

あかねさす日の光やあらん

ほとけとは九界にかゝる雲はれて

とはにかじやく心なりけり

心だに無爲のみやこに住みぬれば

世のさま／＼も見ものなりけり

天地もみなみほとけの中なれば

何處かみだの外にやはある

衣（信仰ある人は心に如來のめぐみの衣を着る）

世のちりにけがれぬ無垢の衣にも

なほ心して染めじとぞおもふ

大ミオヤの慈悲の衣におほはるゝ

身はとことほにあたゝかにこそ

あたゝかに慈悲のふすまを重ね着て

ほとけの中に寝ぬるたのしさ

みほとけのきよき光を衣とし

念のたまをかざりとはせむ

のゝしりの言の銃丸さへ通らぬは

慈悲の衣のあつければなり

いかばかりそしりの矢玉通らぬは

忍辱の衣きればなりけり

かへりみてはぢらひそゝぐ人こそは

きよき衣を着しかひやあれ

食（信仰上の心の糧の義、此身に食なくてはかなはぬ如く信仰の生命

も信仰の糧を要すとのころ）

とこしへにつきぬいのちを養ふは

あみだほとけのかてにぞありける

うけといふうけ多^{おほ}けれどみほとけの

めぐみの味^{あじ}にしくものはなし

大^{おほ}ミオヤをおもふころに融^{とけあ}合^ある

法^ほ悦^のの味^{あじ}のきはみなきかな

言^{こと}の葉^はにつきぬ許^{はが}りに妙^{たえ}なるは

念^{ねん}佛^{ぶつ}さまやの味^{あじ}にぞありける

くみかはすみおやの玉^{たま}の杯^{さかずき}は

我^{わが}みほとけの酒^{さけ}にぞありける

かすもなき三^み世^よのほとけの味^{あじ}ひし

法^{はふ}喜^き禪^{ぜん}悦^{えつ}を我^{わが}が糧^{かて}とせん

六十二

先日申述べ候如く念佛の念と云ふ字は人二りの心なれば全く念佛者となれば從前
の獨身者ではなく心靈は如來と結婚したので如來が我心中に心の妻にかゝらぬ時はな
く、傳大士と云ふ聖者が夜なく佛を抱いて眠り朝なくは還た共に起きと云ふやう
に寝るにも我懷の衷に佛と離るゝことはできぬ。然ればフット朝の寢ざめにも先づ胸
のうちよりつき出づるものは如來をおもふ心よりナムアミタ佛と聲にも洩れ出づれ。
實は我如來を懷きしにはあらで我が如來に抱擁かれつゝあるなり。我悲めは如來は慰
めて下され我憤ればあなたが宥めて玉ふ、行住坐臥にも離れず形に隨ふ影の如し。
慈悲の面影をおもへばすべての事もうちわすれてたのしく感じられ候。朝起きて昇
る朝日を拜むにも、矢張り我いまだ眞の如來を拜むことができぬ、朝日を如來の代理
として心を靜めて念佛し、深く／＼日の中に我心が留まる時は太陽も宛がら彌陀如
來と感じられて

わがみほとけの慈悲の面

朝日のかげにうつろひて

照るみすがたをおもほへば

靈威極りなかりけり

實に惟れば彌陀如來は我ら衆生の久遠却のむかしに我らが**大ミオヤ**に在せり。私共
たとひ迷の凡夫とは云ふものゝ眼は見へ耳は聴き心は思想しすべての此靈魂てふ不思
議なるものゝ**大本源**即ち**大ミオヤ**の如來にて在せり。之を法身如來と云ふ。私共が法
身佛から受けたる佛性の卵は有りも無量光如來の**大慈悲**の光明に攝められ我ら念佛し
て**大光明**に攝められてこそやがて**解化**して**蓮**のやうに**私**どもの佛性は活きて來る。

佛性が活動してこそ眞の佛の御子の心とはなるなれ。口に御名を稱へ意に佛を念ひ
ますく深く入りぬれば必ず觀音ぼさつのやうな心とはならめ。たとひ大きな觀音な
らでも生れた計りの觀音とは爲ること必せり。願くば、**大慈悲**の光り湯地家の家庭に

ますく照り玉はんことを祈り候。寒氣いまだ薄らかず、願くば御自重あらんことを祈候。貴酬旁如斯御座候。

御主人様並に御老母様に宜敷願上候。

藤子サマは能く御へんきやうなされて優等になりなざるやうに御つたへを願上候。

六十三

歡喜光裡に新らしき年を迎へ身心共に新たにしてまた新たならむことを祈候。

御主人様並に御老母様昨今御寒さ中云何に被存在候哉伺上候。愚祈舊冬下旬來當寺に引きこもり候。さておもふに宗教にて先づ第一に信すべき事は絶待的に大なる

ミオヤの在ますことを信じ、常に大ミオヤと親密なる心の聯絡をつけてすべてに超へて愛し奉り、心にかゝりて忘れられぬやうに成る所に宗教の生命をみだし申べく候。大慈悲なるミオヤは子をおもふ慈悲の遺る瀬なきまでに我らをおもひ玉ふ。我ら

がナムアマミタ佛とよび奉れば、我が名をよびて我を頼めよとの聖意に報ひ奉ることに候。我ら御名を稱ふればアナタは聞こし召し、我らが敬禮するすがたはあなたは見そなはし玉ひ、我等があなたを念する心はあなたはよく知り玉ひ、我らがあなたを憶念し奉ればあなたは我らを憶念し玉ふとは善導大師の釋文にて候。あなたは實は久遠來の眞實の大ミオヤにて候。されば釋尊は教へ玉ふ。如來は是れ救世大慈の父にましまして之を念じて忘るゝ勿れと。法華經には三界は我有にて其中の衆生は悉皆我子と示されて候。善導大師も一度彌陀安養界に到るといふは實には本のミオヤの本家に還ることにて候。

我ら迷ひ出たる者故に悟りの本國を還つて他郷の如くにおもふて居ることにて候。ミオヤは本一體に在せども一たび迷ひ出したる衆生の爲に三身に分れて衆生を養成しまだ攝化し玉ふ。

法身としては天地萬物の法則の本體にして日月星辰も地上の萬物も悉く法身の法則

によりて生れ活き候。即ち活かされつゝあるのは全く法身の御恵みと御力によるものにて候。故に法身は現に此生のミオヤにて候。

報身としては法身より受けたる我らが心識は佛性と申して佛に成り得らるゝ卵にて候。卵は産み出されても母鶏のあたゝかなる懷の裡にあたゝめられねば孵化せぬ。

我らが佛性の心性も報身佛の慈悲の懷に攝められて、麗しき信心も開發いたし、いかにせば我らが攝取の光明にあづかるべき哉となれば、先にのべし如く、一心に御名を稱へて専ら大ミオヤを心に念じ奉れば我らが御名を稱へ上る眼前に如來在ますことを信じられ候。報身のミオヤは我らが心靈を復活して佛として下さるミオヤにて候。

應身、人類の如きの身を以て此世に出で玉へる釋迦如來是なり。釋尊は淨土の報身佛より身を分ちて人間の身を以て我らに報身のミオヤを教へ玉ふ教のミオヤにて候。

此三身は本一體にて私共の此からだを活し下さるゝ法身佛、私共の心靈を復活し永遠に活ける佛として下さるのは報身佛にて其真理を教へ下されしのは應身佛にて候。

此の三身を即一のミオヤ即ち

ナムアミタ佛にて候

願くば ミオヤと共に夜晝となく行住坐臥に離れぬやう常に聖名を稱へて如來と共に在らんことをこそねがはしく候

先は御窺かたぐ如斯御座候

六十四

艱難困苦を経て精神を養はざれば眞實に鍛錬しがたし。いかなる艱難も經れば經るほどに自己の氣まゝなる垢滓が除けて心靈の光明を發すべし。

如來の慈悲を力としていかなる苦難をも甘受するにあらざれば心靈の光は發揮せざるものなり。

人の心靈は名刀の如し。刀劍にして若しサビある時は之をトギて其サビを除き去る

ならん。甚だしきサビに至つては荒砥を用ゐて其サビを除き去ることあるべし。若し刀劍にして其荒砥を厭ひ嫌うて之を避けなばつひにサビを去りて名刀の眞價を顯すに由なからむ。人の心靈にして能く練磨して氣質のサビなければいかなる困苦もいかなる境遇にも泰然として不動の心をもつて安んずることを得べし。

事毎に對して非常に憂愁し煩悶する如きは出來事の其性質に於て苦たるにあらずし之に對する人の精神中の煩悶其ものに煩悶と感ずるなり。

同じ事に對して甲の人は甚だ煩悶し乙の人は平然たる如し。前者は煩惱の垢質甚だ強度に有すればなり乙の人は氣質のサビが薄き爲なり。

若しいかなる境遇に臨みても平穩沈靜にして心波を動するに足らずと云ふ如き不動の心念を得んと欲せば其サビを取り除くべきにあり。

サホドに其實に於ては苦悶すべきほどの事なきに非常に風の音激しく汝の爲めに刺激を與へて本よりサビ多き汝をして益煩悶の波動を高からしめたるは

ミオヤが汝の煩惱のサビを除き去りていかなる境遇に於ても安穩不動の心力を起さしめんが爲の方便たることを忘るべからず。

かゝる苦難はしばし經るに随つて鍛錬功を得べし。傷むべきにあらずして眞實の修行を望まばかゝる憂は寧ろ歡迎すべきことである。

ミオヤに對して將來我身を無事にして種々の事の起らぬやうにと祈ること勿れ。よりは、いかなる事に値遇すとも安然として不動の心力を與へ玉へと祈るべし。

汝自ら種々の苦難に對して不動の心力を得たならば將來誓つて世の不幸なる心に悩多き女人のために煩悶の中より救ひ出すやうに

ミオヤに祈りその道のために身を獻ぐべし。

眞實に自ら苦難經驗なきものは眞實他人の憂苦に對して同情をおこすことなしとは眞實なり。

世には他人の憂苦に對して同情を以て之に慰藉を與ふることなきのみにあらず還つ

て他人の憂惱を喜ぶものさへあり。そはその性情にもよるものゝまた一には自ら眞實の苦難を嘗めたる經驗なきにも由るべし。

むかし崇徳院の天皇は無實の罪によりて萬乗の身にありながら四國讃岐の國に遷されたり（即ち島ながしの難）然るに其罪なきよしを幾度か都の方へ傳へられしも用ゐられざりければ、つひに一心を勵まし自分の血を以て三部の大乗經をうつし一心に三寶を念じ誓を發して曰く、我無實の難に苦む、願くば後々の種々の苦難にあふものゝ爲に其の苦難を救はんと。一心金剛の如し。つひに身は崩し玉へども其の靈は金比羅大神として今尙世を利益しつゝあり。

罪なききよき玉體にしても尙かゝる苦難あり。況んや罪に充さるゝ身の苦難多きは數の免れざる所。然れどもこのすべての機會は其身をしていかなる苦難にも憂惱にもうち勝ち得べき心力を修養せよとの命なるを忘るべからず。

凡そ人の修行中に學術よりも技能よりもすべてに超えて最も第一として貴むべきは

自己の精神を修養し

如來の光明其腦裡に常にかゝりやきつゝありて、いかなる場合にも安然として動せず、而して其胸裡の光明は慈愛の源となりて他人に對しては同情となり怨親平等に人を怨まず憎まず自ら恣ならず人格高等にして理想高尚にして遠大なる希望を有し常に希望の光明は斷ゆることなし、かゝる人こそ人中の最勝者たり。高等なる人格を修養せんには種々の困難と辛苦とを経ざるべからず。御身は已に此機會をミオヤより與へられたり。然るに之を思はず之を考へずしてこの修行の機會を逸するならば何の日か修養すべきぞ。

只寧ろ要せざる心意を用ゐ、修すべきをすて、思ふべからざることを思ひ、考ふべからざることを考へ、貴重なる光陰を空うする、いかに愚なるぞ。

御身はこの好機會なる砥をすて、斯ることをすまして平生無事にして鍊修せんとする如きならば、いかに無下なるぞ。斯る好機會を得ざるものは終身實地の修養能は

ざるなり。

予は思ふ。御身の愚なる、この好機會を左は悟らずして、これがきまりつきで、心安らかに修養せんとといふ如きぐづく淺ましき日暮しすることならん。これぞ御身が永年月を空しく經過して精神の光明を發揮すること能はざる所以なり。

斯かる人に對していかなる砥を與ふとも其錆刀を磨くべきを知らず、砥をはなれて外に磨くべき機會を求むる如きは愚もまた甚しきなり。

今回の事にしても事實はさまでの事にあらず。只御身をして鍛鍊せんが爲に其聲を高めたるに過ぎず。然るを御身は錆を除き去るを悟らずして却つて憂愁の習慣を増す機會の如く感じたるべし。愚もまた甚しきにあらずや。

折角に身を佛門に寄せ肉の生活を本位とする人と同じ觀念を以てするとは何ぞや。世に精神修養なきものほど不幸なるものあらじ。

自ら苦をつくり出して自ら苦む。

光明を求むるものは不幸を轉じて幸福とす。災を變じて福とす。斯かる機會のあらに非ずはいかでか鍛鍊を得べきぞ。

然れども御身は云ふならん。他の事ならばいかなる事にも安忍すべきなれども此事ばかりは憂惱せざるを得ずと。そもく之が修養の機會を逸する元因なり。若し全く修養の精神あらばそれと反して言はん、他の事ならば兎まれ、この事にして安忍し鍛鍊せずんば何の事にてか修行すべけん。之を喜ぶに至つて初めて一分の修養をせしものと云ふべし。

御身は只いかなる事にも驚動せざる精神修養だに成すならば足りぬべし。

ミオヤを頼め。

然らばミオヤはいかなる力をも與へ玉はん。

女子はかよはきは天性なり。然れども全く心一に至るときはまたいかなる事にも動ぜざる金剛心も却つて男子よりは強きにいたるもまた天性なり。何ぞ一心に信念を養

ひて精神の奥に潜める金剛心を發揮せざるぞ。

此他の事を云ふべきは御身は必要あるを感ずるならんもそは何にてもよろしきことにて、只要す、貴重の光陰をこの修養に用ひられんことを。

六十五

自身より觀るも世間より觀るも妾ほど不幸なるものは少からうと存じます。かゝるもの世に生存する甲斐もなきとまでに自分からも他人からも思はれますと云ふ外ありませぬ。かゝる不幸の妾が心の奥にも不思議なことにはこれでもこの不幸を轉じて世に妾ほど幸福なるもの恐らくは有るまじと云ふ幸福は與へらるゝものと信じて、之に向ひつゝある希望の光はかすかにも前途にみとめて斷えませぬ。此希望の光こそ妾を精神的に自殺せしめざる所以にてぞある。

何故に妾は不幸であるかと云へば、早く頼むべき良人にわかれ寡婦となり種々の困

難は競ひ起り獨り浮世の浪路をたどり行く前途を煩ひ居りしに、果せる哉昔は不治の病とも云はるゝ病魔の爲めに侵さるゝ身とはなれり。實に以病にかゝらば死の宣告を受けし如くに感じらるゝなり。

此病魔を退治するをうることを發見せらるゝ今日と雖名醫の命するがまゝに治療と充分の滋養とを以てするにあらざればとても望みなしとのこと、そは今の妾が身の上にては經濟のゆるさるゝ所なれば、只死をまつのみに日をくらすも、いかにも本意なきことに存じ候。然るに有りがたき事には妾は六年已來宗教の信仰によりて精神上處世上心大に慰安の道を得たり。それは病魔の外に非常なる煩悶の身に逼り來るに際して、若しも神の光の認むるなくば寧ろ華嚴の瀧淺間の煙とも消えはてまじをとの決意は果して起りしならん。然れどもかゝる境遇にも神は安んじて、忍べよ、此の忍の奥には必ず極樂はあり、との神の聲は妾が心の耳にさゝやきぬ。之を力として此の煩悶もすぎゆきぬ。今こゝに勇氣を鼓舞して闘はざるべからざる大敵は例の病魔なり。此

の戰闘に於ける參謀は即ち良醫なり。又この敵に向ふ兵站部は適する所の滋養なり。然るに不幸なる妾は此參謀官までも失ひ兵站部をも力の及ばざる地に落ち行かざればならぬ身とはなれり。いかに罪のふかき妾の身にもあはれかなしくもあるかな。

こゝに於てかこの不幸なる妾をこよなき幸福なるものと精神的に心機轉換せしむべき時にいたりしなり。那邊が是れ妾が爲にかゝる境合に幸福てふ觀念を發見しうべきぞ。天廣く地濶くもこの妾が爲に幸福の花を得べき地はあるべき筈はなかりしなり。然れどもこゝに不思議なるは神はかゝる所に於てまでも幸福を感じうべき草はかくし造りしなるを發見せり。いかなるかこれ妾が爲に神は福音を洩し玉ひしぞ。

明き日光と鮮なる空氣と價安き養分とを妾に與へ玉へり。價なしに得らるゝ精神上の神の恵に物質上には明き日光と鮮なる空氣と價安き養分となり、神の賜なる自然によりて此病を對治し、神より示されし智慧は病理にくらき妾に病を對治する智識を與へ玉ひ、我が神の賜なる自然療養によりてこの難き病魔を對治し、自己の實驗を以て

世の我と同じ不幸なる人の爲めに福音を宣傳せんとの啓示は、これぞ妾に大なる希望の光となりしなり。

神は肉にも靈にも超自然の力をも以て幸福を與へ玉ふとの信念は妾が胸中に耀々たるなり。

此耀々たる光明こそすべて身心の病を癒して常住の平和を與へ玉ふなり。

一、如來の心光威力は一切の處に充滿し我が心身にも滿しめ玉ふことなれば我が信念の力はこの光明威力と致一して我が身心を安からしめ玉ふ。

二、日光は我が鮮血を造り病魔を對治する力を與ふ。

三、鮮かなる空氣はまた我が血液を清らかにして病を對治する力を與ふ。

四、安價なる鮮肉と養分を攝取し力ある脂肪と力ある血液を造ること。

海岸にて松をとほす風、日光、價安き魚肉の鮮かなるもの、活力ある脂肪と活力ある血液が病を對治する物質的軍勢なること。

いかにしてこの脂肪と血液とを赤貧なる妾に造りうべきか、これ妾が爲に安價に軍勢を造る將軍となりて世に福音を傳ふべき使命を被むりたるなり。

いかに愚なる妾とてもこれだけの智識はなくてはならぬものなればこれを研究しつゝあるなり。價安き此兵站なること。

太脳はすべての身體一切機能を支配する中央政府にしあれば太脳に無上の力を與へざるべからず。これぞ神即ち如來の威神光明を仰ぐゆゑなり。自ら身心の病魔を對治し自己の經驗を以て世の不幸なる同胞に福音を傳へまほしきこの希望の光こそ妾か精神に前途に幸福を認めつゝある所以なり。若し我この不幸に陥入りし身にならば金と他人とにのみ依頼して自ら幸福を造り出さんとの勇氣はとても不可能なり。この不幸に陥りてこそ大幸福の道を發見せんとの獨りのみならず世の人々と幸福を共にせんとの志しは起りしなり。是ぞ不幸なる妾が爲めに大幸福と轉せしめんと希望の光として現はれたるなり。ナム。